

用途 シギボも、アンタンも、燃料として利用されている様子を j 氏自身は見たことがない。しかし、シギボを乾燥させて燃やしたという話は聞いたことがある。アンタンについては、i 家（榎林㊟）のように風呂焚きに利用することはなかった。j 家には風呂がなかったので、向かいの i 家で風呂を沸かしたときに貰いに行った。普段は川で入浴した。「(田の下から出たシギボを乾燥させて燃やしたということ)、それも聞いたことある。実際オレだちの今 81 (歳) になるんだけど、それながったけども、まあ、上のオヤジがだたらなんとなくこう、聞いだりして」「(隣家の i 家のように風呂で利用したことは) ない。いやあこの辺でも風呂あるウヂあホラ、オラホにはながったけど隣にあった。となりづのはこのウヂ (i 家) だな。あの、一棟たてであってね。だからその風呂だつてさ、1 年に何回しか行がなかった。あど川さ行って、そんなもんで。(冬は風呂は) まあ、入ったけどもそれ今しゃべるごぎ、例えば隣で風呂わせば前のウヂだば沸がしたの、私もわがい頃だがらな。ほらこの人のおじさんがこれとおんなじぐらいのいべえいだがら、まあ、燃して風呂へ入ったりどが。」

その他 j 氏の世代よりも前の時代には、周辺には店が建ち並び、賑やかであったという。「けっこうこの辺のあの店や、だいぶあったんだ。オレだち知らない時代。いや、まあ、炭どがアメちゃとがそのぐらいのもんでしょ。こあ、計算すれば結構あったんだ。そのスミコがらあたんだその坂がら上までアノあら、なんぶのめ (前) のエ (家)、あのベゴどごのエ (家) づどご (屋号で呼んでいる)。」

(2016年7月17日取材)

㊟榎林 k 氏 昭和22年生(69歳) 男性

居住の経緯 k 氏は夫妻でタバコ栽培を営む専業農家である。近年は禁煙が推奨される傾向にあることから、栽培を続けることに何となく気がひけるという。後継者についても「今まだワガイ人やんねがべ。自然消滅だな」と語る。作っているのはバーレー21。「手間かかるの。これ小屋さ持って来たら掛けで、こだ乾げばこさ寝せで、こだタイセキ (堆積貯蔵) して、梱包して、それをまだ選別して」「8 月で全部幹刈りやるんだよ。で、ハウスさ乾がして、9 月でばそれがら××ねばなねのよ。12~3枚剥がす。それを9月の中頃から剥がして、また分けて。ながながめんどくせ」というが、「それでも割と、アレだんだ (やりがいがあるんだ)」と、当面は栽培を続けていきたいと語る。

呼称 シギボと称した。また、アンタンと称する燃料についても聞いたことがある。

使用年代 シギボの利用については知らないが、アンタンについては記憶がある。採掘の様子を見たが、それがいつ頃であったかは思い出せない。k 氏は昭和22年生まれだから、戦後の話であることは確かである。「(シギボは) そうそうそう。あるんでえ、向ごうに。(しかし、シギボを燃やしたという記憶は) ああ、ねえな。」「(アンタンを採掘して燃料にしていたという話は) あるあるある。オラもキオグあるもの。(いつ頃かと) そてへらいればなあ (わからないなあ)。(生年は昭和) 22年 (生まれです。))」

定義・分布・質 シギボについて、k 氏の夫人は「草のようなもの」と説明する。また、アンタンは昭和地区の手前、低い場所にあったという。「昭和村って。今も昭和村。(アンタンを採ったのは) 下のほうだんだねな。」

採取の時期・場所・主体 アンタンは、昭和地区の手前の沢の奥のほうから採掘されていた。「ショワムラ (昭和村) のあの、乙供さ行く、あそこでむがし、アンタンどかなんどがってよ。あの乾がして燃やしたやづな。アンタンどがなんどがってったな。乾がしてやづばよ。昭和村ってよ。小学校まで行がねんで、乙供さ行く小学校 (東小学校) さ行く途中にこう、こう、橋あるんだでやあ。そご行けばむがし、そごミヂあってよ。今ブダゴヤだ何が建って、壊したどごあるだいな。そごの奥のあだりにあの、採ってかわがしたり何したりしたキオグある。」

乾燥・運搬・保管 昭和村近辺で乾燥させている光景を k 氏は目にした記憶がある。「この辺だば聞いだづぎあるたて、見だづぎもせえあるごった気もすたつてな。何。」「あそごさ行けばよ、ショワ (昭和) 村さ行けばよ、シャモあずがってる (飼育している) 人あんだねな、あの東小学校さ行くどごどよ。あの、自動販売機のどごにウヂある。あの、鶏あずがってよ。そごのワガイ人がら聞いてみれば。ムガシそごの人よ、下のほにウヂあってよ。アンタンどが何やってらどごあるんだいな。×× (t 家の苗字) なん……×× (名前)。うん。そごさ行って聞いてみなが。」「右さ行けば小学校あるべ、そのちょうど反対側。」「そごの人、わけえ人、もしかせば知ってるがもしれない。その辺で干したの見だの記憶あるもの。」

用途 k 氏自身は、採掘や利用の経験がない。また、「乾燥させて燃やした」とは言うものの、どのように燃やしたのかはわからないという。(燃やしたという経験は)「ちょっと、難しいどごだ。歳いった人どだばけっこう覚えてる。」(榎林で燃やしたということは)「わからない」

その他 シギボについて尋ねると、k 氏の夫人は「草のごったあ」と答えた。しかし、燃料としての利用について尋ねると、シギボではなくアンタンについての説明がおこなわれた。榎林では、自ら採取して利用する燃料といえばアンタンの印象が強烈であるらしく、シギボについて尋ねた場合に、アンタンについて説明する場合が多くみられた。

(2016年7月17日取材)

③榎林 1 氏 昭和17年生(74歳) 男性

呼称 泥炭はシギボと称した。アンタンと称するものを使用した。

使用年代 1氏がアンタンを使用したり、目撃したりしたのは、小学5～6年ころ、つまり昭和20年代後半であった。「(使ったのは)子どもの頃。(生まれは)17年だよ。」「いづごろて、ちせ頃だから、小学校5～6年が、こして掘って干して、天日に干してさ、で乾いたころ持ってきたんだよ。」

定義・分布・質 アンタンは、客土をする土を採るために掘った場所から出てきた。その場所は、榎林から乙供に向かう国道394号線、昭和村付近の沢であった。「いや、ほとんどこっちから採れるでねえ、向ごうのほうから出たんだよ。向ごうの、低いどごあるでしょ。乙供さ行くほの。あのヤチケ(気)のほうへ、山のこう、掘ると、中間あたりにあるんだよ。アンタンアンタンって。かあがして(乾かして)燃やしたんだ。」

入手法 アンタンは、採掘によって入手した。シギボを利用することはなかった。客土しても別の場所が膨らんでくるため、いたちごっこであった。「シギボだったら使わねえな。ま、入れ替える人だけで、エの入れ替えすればたて、まそれでも向ごうのほうはもう、シギボ下もやわいがら、いぐら前にやらなきゃだめなんだ。こう穴になるがら。こっちにやるとそちもふぐれでくるんだよ。やわいもんだがら。こち重くなるもんだがら、そちのアレれで。うんまあ、その繰り返し。」

採取の理由 アンタンは、低い田やぬかるんだ場所に入れるための土を採取する際に採掘した。つまり、副次的に産出したのが利用のきっかけだという。周辺は木も豊富であったが、アンタンをも使った理由は、「使えるものは何でも使った」時代であったからだとして1氏は語る。「向ごうのほう(国道394号線、昭和村付近の沢)にこういうどごれ、こういうどご崩して(その土を)田んぼの低いどごとが、ぬがるみに敷いだんだよ。そいづぎ出できたんだよ。」「いやあ、田んぼもアレだけでも、田んぼをやるためにも掘ったべし、それさ出できたもんだがらほら、硬いもんだがらほれ乾がして、燃やしたどぎあるんだ。」「スカッと雪づが雪も消えて、そいづぎほれ、ツヂ、客土ってあの、そごヤチだから、へて掘ってるうちに出でくるんだ。」「わりとほれ、ヤチぬがるもんだがらほら。なんがツヂ入れないとホレ、下がっていぐもんだがらみなそやるんでえ。客土するツヂはごんだ時点でほいふな出できたがら(アンタンが当初の目的ではなく、客土する土を掘るときにアンタンが出たので)。客土は客土のツヂ、アンタンはあんまりアレだから、そちいってどげだりして。(専門に商売にするというのではなく)ただ出できたがらほれえ、もどムガシまあ木もあったんだけど、それを乾がして燃やしたらいつのでそれを燃やして、まそればっかりアレしないけどな。(木がたくさんあるのに、アンタンも使ったのは)どういう理由って出たがらかがして(乾かして)燃やすだけでしょ。なもどつか違うのはあねんだもの。まああるものは使ってその頃は何でもかんでも使ったんだもの。」

採取の時期・場所・主体 採掘は、雪の消えた春以降、客土の作業にともない、男性中心でおこなわれた。場所は、国道394号線、昭和村付近の沢であった。「春やっぱりユギ消えてしまってるがらな。だあ、冬だとホレ、今だったら機械もあるでしょうけども、その当時はなもながったもんだがら、スカッと雪づが雪も消えて、そいづぎほれ、ツヂ、客土ってあの、そごヤチだから、へて掘ってるうちに出でくるんだ。」「(掘るのは)まんず男だ。女の人だあやらない。」

採取法 1氏はアンタンを使用したことはあるが、自分で採掘したことはないため、採掘の道具や方法の詳細はわからない。当時の状況を考えればスコップやモッタを使用したのではないかと1氏は考える。「(採掘の道具)知らない。まあ、シコップがモッタが。そんなもんだべ。なんかつけで、運んでほれ。まそんなもんだべ。シコップどモッタぐらいのもんだべ。」

乾燥・運搬・保管 レールを敷設し、トロッコで運搬した。トロッコで運ばれたアンタンは次々と積み重ねられていった。女性や子どもが作業にかかわることはなかった。採掘されたアンタンは天日で乾燥させた。乾燥したものを各家庭へ持参して用いた。「(運搬を子どもが手伝ったことは)そんなのねえな。全部男で、あのトロッコさつけで運ぶんだよ。こう敷いでほれでそご終わればまだこつ移動してつてれ。いぐらも掘んないがら。そういつてやったもんだ。レールひいで、ハゴみたいの付けで、押して行って、なもちいしゃこへばかえしてほれ。そさ置いでまだそご終わると、も一人持って行って。全部足していぐわけ。大々的に。」「いづごろて、ちせころだから、小学校5～6年が、こして掘って干して、天日に干してさ、で乾いたころ持て来たんだよ。」

用途 アンタンの用途は燃料であった。マキの上にアンタンをのせ、フキなどの野菜や蔬菜を鍋釜で煮るために用いたという。大抵は屋外で用いたが、煙が強かったからではないかと1氏は考える。榎林地区の他家では、風呂焚きにアンタンを用いたという話を聞いたが、1氏の家では風呂焚きに用いたのはマキであった。「燃料、まあ、燃料だな。かわがしておいで、燃やすごとあるんですよ。」「いやあ、まあストーブってストーブもねえがら、まあ焚き火やってその焚き火の上にあげてとか。もどストブもながったべしたんだこいうどごさ乾いだ木をやってそごさ上げで。まあほとんどソドでええ乾がして、使ったようなもんで、ナガさほとんど使わねがったべ。家の中では使わねえ。何ってなんかほれ、フキでも何でも採って来たの釜がナベかげでなもそれで燃やして。風呂焚きそんなもの使んないよ。」

それはもう煙突の風呂だがら、マギ切たぎてそれに火付けで燃やしたもの。」

副産物 ニオイは強く感じないが、煙は強烈であった。「(煙やニオイは) ああ、ニオイはそんなにないけど煙はすごいんだ。(目には) んああ、すごまで、痛がったがもしれない (笑)。」

(2016年7月17日取材)

㊸榎林 m氏 昭和5年生(86歳) 女性 m氏長男 昭和24年生(67歳) 男性

呼称 昭和5年生まれのm氏は、泥炭をシギボと称した。m氏の長男(昭和24年生)は、シギボを知らない。また、兩名ともアンタンと呼ばれる燃料について知っている。

使用年代 m氏の長男が子どもの頃(昭和30年代)にアンタンの地層を見たことはあるが、「もう使ってるアレ(時代)ではなかった」という。この証言に基づけば、昭和30年代には採掘や利用はおこなわれなくなっていたらしい。

定義・分布・質 シギボについては、昭和5年生まれのm氏によると「草の枯れたようなムガムガ」としたものであるという。「(シギボ自体は) 聞いたことある。けど燃やしてアレすずのは聞いたことない。ツヂ掘ればの、何つうのが、こう、草の枯れだおんたこうムガムガづおんた」(m氏) / 「知らねえ。初めて聞いた」「(燃やすというのは) そんなのは全然聞いたことない。うん」(m氏長男)

いっぽう、アンタンについては、m氏の長男によると、国道394号線、昭和村付近の沢の地層に見えており、「木が積み重なったような、炭になる手前のもので、普通の木よりは炭に近いもの」であるという。そしていわゆる「亜炭」のことであると話す。「聞いたことある。あの、今もあるよな。あそこ、地層にこう、出であったんだもの。石炭になる手前のだよな。アタン(亜炭)って言うな。アはアジアのア(亜)で」(m氏長男) / 「あそこに、サガのどごに」(m氏) / 「地層出てるどご掘って、で、その層が、すっかり腐ってしまわない、あの、木の積み重なったみたいな、炭になる手前の、ま、もちろんアタンていうぐらいたがら、普通の木よりは炭っぽくなるけどな。オラだち小さい頃はそういうの見えであったがら」(m氏長男)

用途 m氏の長男によると、自身が利用したことも、利用の光景を見たこともないという。単に知識としてその存在と名称を知ってただけだという。「使ったのはない。それが燃えるとかってアレにして。そういうのアタンでいうんだって知ってただけ」「いやいや。もう使ってるアレ(時代)ではなかった。うん。これはそういうものだったという。地層にも出てたがら」(m氏長男) / 「掘ったアドだばあるけどな」(m氏)

その他 アンタンの利用については、この集落では一般的に知られていることであるとm氏の長男は語る。とくに、昭和集落付近で採掘が盛んであったという。「普通、知ってんでねえがな。あの、あそこにあるんでえ。ショウワってブラグあるでしょ。こごちよつと上がって下がって、乙供行く途中。あそこの右側に、あのあったんだよ。今ブダゴヤあるけども。」「×××(個人名、t家)のところから、もっと入ったところで採掘していた」(m氏長男)

(2016年7月17日取材)

㊹榎林 n氏 昭和21年生(70歳) 女性

居住の経緯 n氏は昭和43年頃、小泊(北津軽郡小泊村、現在の中泊町)から当地に嫁いだ。「こちゃ来てがらだよ。オラ海端(北津軽郡小泊村)で育ったがら海端ではそういうのねけども、こちきてがらの話。うんうんうん、うだよな。43年、42年頃来たしてな。うん。」

n氏はタバコ栽培農家で、7月中旬は「タバコとし(通し)」の最中であった。タバコ通しはタバコ編みともいい、葉を干すために二本のアサナワ(麻縄)の間に葉を挟んでいく作業である。ハウス内で干すための準備作業であり、お盆前まで続く⁴⁰⁾。半乾きになって赤くなったら、小屋に入れて乾燥させる。雨が続きとバーナーをかける場合もある。お盆過ぎになると「幹刈り」といって葉がついたままの状態のタバコをナタで刈り取り、小屋掛けして乾燥させ、9月に入ると茎から取る作業(葉っぱもぎ)をする。9月なかば過ぎたころには、先にタバコ編みして乾燥させた葉を抜き取り、寝かせる。周辺は葉タバコの産地である。

呼称 シギボと称した。

採取法 n氏は嫁ぐ前、四角く掘り起こされたシギボが積まれ、乾燥させて燃やしている光景を見たことがある。それを、出身地では何と称したかは覚えていない(n氏は小泊村出身だから、当時見たものはサルケであったと思われる)。こちら(榎林)に来てからは、同様の光景は見たことがないという。また、アンタンあるいはデイトンという言葉は聞いたことがないという。「聞いたことせねたて、シギボだばおべでる。」「あの、干してだべ。干して燃やしのだべ。なんだっけ、それをなんてった。いやあ、ほにやほにやほにやムガシ、なあ。あつてったんだ。干して、それを燃やしてな。覚えでる覚えでる。いや、見だ、いやあ、オラど、オラどメラシのどぎだものな。オラメラシのどぎでったあ。メラシあ、ハタチ前。今70だ。うん。(生まれは昭和) 21年。オラどであもう、な。もっと歳行ったフトだらな。(私が見たのは) 小学校でもねんだであな(もう少し年がいったからである)。うん。なんてへったっけな

それ、レンタンでねし、何だっけ、なんかだってへってな。うん、きだごどある。こしたらね、四角ぐ、切たぎてせ、うん。とてたんだ。（積んで干して）それを燃してたの。うん。いやあ、掘ってるの見だごとあね。干してるのは見だごとある。その採ったのは見だごとあねな。うん。燃やしてるのな、や、そへればどんでったんだがな。そういうのは記憶あるったってうん。」

（2016年7月17日取材）



タバゴトシ（たばこ編み）

④榎林 o氏 昭和22年生(69歳) 男性

呼称 泥炭をシギボと称した。また、アンタンと称する燃料について知っている。

使用年代 シギボを利用したことはなかった。アンタンは、戦中に掘られていたのではないかという。o氏が子どものころ（昭和30年代前半）にはすでに採掘されておらず、アンタンの廃坑に入って遊んだ。「掘っていたのは）はあ、戦争当時だろう。今だばあの、木炭バス知らねえべえ。ああいうのさも使ったらしんだよ。うん、マズの櫓でこう、やてらのみな、オレ子どものあだりせ。」「小学校4～5年あたりだな。こごなんか、沢であったもの。」

定義・分布・質 o氏は金木（旧北津軽郡金木町、現五所川原市）に田を作りに行ったことがある。そこで、シギボが燃えるのを見た。シギボとは、土の腐ったものであり、湿地帯であればどこにもあるという。地盤が軟弱であったが客土した結果今はどうにか農業機械が入れるようになったという。「（シギボとは）ツヂの腐って。うん、ヤヂはみなそうだ。湿地帯みたいなので、ゆらゆらづみたい。みなあだがらツヂあはごんで、今の田んぼトラクターやっとうるようになってる。まあ、あれは金木さ田んぼつぐるに行ったどぎ、シギボ燃えるもんな、あれ。クロ作ってもダメでったもの。（金木に）オレ田んぼつぐるに行ったどぎある。（こちらでは）いやあ、まあ、ツヂねんだもの。みな馬車で配って土あもう、入ってるがらな。（燃料にしたという話は）ほとんど聞いてねえな。アンタンだら（聞いたことがあるが）。」

入手法 シギボは利用しなかった。アンタンは採掘によって入手した。

採取の時期・場所・主体 アンタンの採掘は国道394号線、昭和村付近の沢でおこなわれた。

採取法 アンタンの採掘は、横穴を掘っておこなわれた。穴は800メートルほどの奥行きがあったという。松の木で組んだ櫓も見た。「うん、マズの櫓でこう、やてらのみな、オレ子どものあだりせ、××採ったりすに入ったりしたけども、もう水だけしか出でねがら。（穴が）あったんだけど、埋まってる。」「もうほとんど崩れでるの。でもかなり入ってるな、800メートルぐらいもあったな。」



奥の谷間が坑口のあった場所

用途 アンタンは、木炭バスの燃料にしたり、家庭の燃料としても使われたらうとo氏は考えている。ただし、自分で使用したことはない。「今だばあの、木炭バス知らねえべえ。ああいうのさも使ったらしんだよ。」「（家で焚いたりしたことは）したどおもる。あまり詳しいフトいねえべえ。今。なぐなて。」

いっぽう、シギボを利用したという話は聞かないという。「（シギボを燃料にしたという話は）ほとんど聞

いでねえな。アンタンだら（聞いたことがあるが）。」

その他 子どもの頃、アンタンの坑道がo氏の遊び場であった。廃坑から水が流れてくるので、サワガニを捕りに行ったという。現在は、「退屈しのぎに」その水を利用して親戚とともに趣味的に養鯉をおこなっている。「（自分で使ったことは）ないないない。（子どものころに遊びに）ほらサワガニいるがらほら。捕りに行ったりして。もうほとんど崩れでるの。でもかなり入ってるな、800メートルぐらいもあったな。だあ、水切れないでいるけど。（その水を利用していま）サガナ（鯉）あずがってるの。イドゴど二人で。」「沼のどごだ。サガナあずかっている（養っている）の。ウヂのイドゴど。うん。あづの、今もう崩れでないけど、水ばり出でる。（こっちから行くと）左かわ。

鎖張ってるどご。左側のほう。あの鉄塔の下だから。うん。鶏小屋ってあそごブダ小屋下がっていけば、左かわにワイヤー張ってある。そごこう、入っていけば、分がる。おぐさ入っていけば。」

(2016年7月17日取材)

④榎林 p氏 昭和10年生(81歳) 男性

居住の経緯 田を経営していたが、のちに養豚をおこなうようになり、現在は養豚をやめて畑作に専念し、豚舎は農機具置き場として利用している。「田んぼあってな。そごら付近にすぐそばに田んぼあったんだ。うん、ウチはせえ、ずっと向こうだけどもな。あのこの村のもっと上のほう。」

呼称 泥炭をシギボと称した。また、アンタンと称する燃料について知っている。

使用年代 アンタンの採掘がおこなわれていたのをp氏は見た。昭和20年前後のことである。「(アンタンを掘ったという話を聞いたことが) ある。ああ、もうずっと前だ。むがし、われわれあ、10…16年、何年かなあ、小学6年か3～4のあたりな。うん、ほだなあ。その頃だと思ふ。」

採取の時期・場所・主体 小学生の頃のことであるため記憶が定かでないが、採掘をおこなっていたのはこのあたりの人ではないだろうとp氏は語る。「この辺はそごの(掘っていた人は)、どごの人だんだが、それわがねがったもんな。うん。おそらぐ(この辺の人では)ねども、でもどんだんだがな。」

採取・乾燥・運搬・保管 トロッコの線路が引かれていたのをp氏は見ている。しかし、採掘や運搬の具体的な様子については覚えていない。「そごのずっと前田んぼあったどごでな、そのあたりあ、その掘った穴、トロコの線路がそいいうのんどごいう具合にしかだづげだんだがわがねもな。うん。」

用途 シギボを燃料として利用した経験はない。p氏が自宅で燃料にしていたものは、マキであった。「(シギボを掘って乾燥させて燃やしたことは)「それあねえなあ。うん。それあねえなあ。」「(自宅では) 木。マキ。あの、小さい、そういう木な。木をアレして使ってたな。うん。当時はまずマギ。マギ燃やしてな。アレしてたな。」

アンタンについては、採掘している様子を見ただけで、どのように使われていたのかについては知らない。「(使ったのは) それあわがね。どういう具合に使ったがな。それあ当時はもう、石炭まづな、石炭そのあたり、どういふアレで使ったが、その当時は石炭どがなんとがこの辺で北海道のほあ豊富であったんだが知らねけども」「この辺でまずな、それをアレして使ってらづそのアレはねがったどごでな。」

(2016年7月17日取材)

④榎林 q氏 昭和12年生(79歳) 女性

居住の経緯 q氏は榎林出身で、平成のはじめ頃に昭和村にきた。昭和村とは、もともと榎林に住んでいた人たちが昭和期に移住して成った集落である。「みなこの辺はみな榎林。みなそっちのほの榎林からこっちさ上がった人ばかりだから。」「みな昭和の時代になってがら、こちゃ××さん(t家)のどごの人んどもこちさ上がったんでねがな。」

呼称 アンタンという呼称を聞いたことがある。

使用年代 q氏が昭和村にきたのは平成のはじめ頃であり、アンタンの採掘はおこなわれていなかった。ただ、この地域でアンタンが使われていたことについては聞いたことがある。「聞いたごとはあるの。オラもまず25年ぐらい前かな、こごにきたばっかしだから。(その時はもう) やってないやってない。年いった人みんな死んでるがらね。覚えでら人ってばちょっとなあ。今のどごいないんでねえがなあ。」

用途 「ただそごでどごまで掘って来てるがはわがないんだけど、それごそ沈没するがもわがないって話は聞いてるんだけどね。うん。みんなハア覚えでる人んどあみんな亡くなってるがら。何かあの、何てへば、うんとムガシ風呂に入るにも、マギ燃したべ。そのそれに使った、××さんどご(t家のすまい)が、そごの、ちょんどこの下ばらの田んぼのほのそちのほにあつたがら。」「(炊飯などにも)使ったんでねべがなあ。わがねけど。そごの××さん(t家)の孫ばあさんだ。孫ばあさんがよぐあの乾がしてそして風呂わがしたりそしたりした話は聞いてる。」

(2016年8月27日取材)

④榎林 r氏 昭和46年生(45歳) 男性

呼称 アタンと称した。

入手法 自家用として各家庭で家のそばから採掘して利用していた。

採取の理由 各家では自家用燃料として、業者は商業的に採掘をおこなっていた。

採取の時期・場所・主体 自家用としては、「s家(次項、榎林⑤)のババ」が家の横で採掘していた。t家でも、家の横を掘るとアタンが採掘できたことからよく利用していた。商業用としては、t家のそばに採掘作業員として働く××氏(個人名)の一家が住んでいて、亜炭を扱う会社の従業員として専門的に採掘していたという。「sのババ、

s さんて。この端のおばあさん。あのおうちの横で掘ってたから。いちばん年いってるがら」「ここに掘ってた人の家族が住んでたっていうのは言ってたからね。ここにおうちがあったっていうのを。はい、ここで作業していたのを。わがんだいけど、そご穴が、いぎなり陥没するどごがあるがら、子どもだちやるなよっていうのはおじいさんがら、どの辺まで掘ってるがわがらないがらって」「（ここに住んで掘っていたのは）専門の人だったみたい……もともと住んでた人たちなんだべ。××さん（個人名）っていう人は発掘員かな。みたいなのあったみたい。で、××さん（個人名）？、向こうにあったの、その人の奥さん、か」（r 夫人）／「旦那さんが、結局亡くなったどごで、身よりもねがったどごで、こごさ家建でいでったの。うーん結局ハアだってあれえ、アタンだなんがで、おっきい会社で掘ったんでねえが」（r 氏）。

用途 t 家では、風呂焚きや湯沸かしにアタンを利用していた。いっぽう、r 家でも昭和19年生まれの祖父がしばしば採掘について語っていたが使用の詳細は不明である。「前の人んどあ（t さん一家）あの、あっちにホラ、火事で焼けるまでは、アタン使って」（r 氏）／「家の横掘ればもうアタン出てきたみたいだもの。山から」（r 夫人）／「アタンあてだどごで、風呂どが何どが、そう湯沸がしたりしてた」（r 氏）／「山の中に行けば、いぎなり陥没してるどごああるって。オパチャンだちがね。入り口は崩れでないけど。でその掘ってったのの何が拍子に崩れだどごはそっちの山のナガにはあるって。だから多分それアタン掘ってったやづだろうねえって」（r 夫人）「（r 家で掘ったことは）ない。（使ったことは）そごまでは聞いてないけどおじいさん育づどぎは（まだアタンの採掘を）してだがらね。」（r 氏）／「（r 家の）おじいさんから、よくその話は聞いてだったので」（r 夫人）。

その他 s 氏によると、t 家では、自宅が火災で焼失するまでアタンを自家用に利用していたらしいという。また、本格的に採掘をおこなう業者があったので、今でも山中には坑道が崩れて陥没した場所があるという。r 氏が子どもの頃は、突然陥没する可能性があり危険なので、近寄らないようにと言われていた。

（2016年8月27日取材）

④榎林 s 氏 昭和26年生(65歳) 男性

居住の経緯 s 氏は、小学5年生の時に昭和村に移住した。高校卒業後はふたたび他所へ出た。当地へは最近になって戻ってきた。

呼称 アタンと言った。

定義・分布・質 「昔なんか土なんだったよね」と語る。土のようなものという意味だろうか。

使用年代 昭和30年代後半ころから、40年代前半ころまで、昭和村のt家で使用しているのを見ている。同家は、その後火災に遭った。アタンを使わなくなったのは、火災がきっかけではないかと考えている（t家の当主に尋ねたところ、事実ではないことがわかった）。「うんとねえ、5年生の時ここ引っ越して来たんだよね。だからその頃だから、それから高校くらいまでだから、そのうち（tさんの家は）火事になったんだよね。だから使わなくなったんじゃないのかな。火事になったのはいつか、（ここに）いなかったからわかんないけど。」

入手法 s 氏の記憶によれば、昭和村でアタンを使用していたのは、t家だけだったという。商業的な採掘ではなく、あくまで自家用であった。「（トロッコなどで大々的に掘っていたのではなく）手掘りじゃないのかなあ。だってそれ使ったのそのウチー軒だけだったよね、オレが見たのは。他で使ったって話はあんまり聞かないね。うん。」

採取の理由 燃料として利用するため（風呂の燃料として利用している光景を見た）。

採取の時期・場所・主体 現在よりも少し榎林側に道路を下った場所にs家の住居があった。隣がt家で、t家が自家用に採取をおこなっていた。「昭和村でアタンを利用していたのはt家だけだった」というs氏の証言が正しいとすれば、「s家が採掘していた」というr氏の証言（前項、榎林④）は、実際はt家で採掘していたものを、隣家のs家で採掘していたと見間違った可能性もある。

乾燥・運搬・保管 天日で干していたのではないかとs氏は考えている。

用途 昭和村のt家では、風呂の燃料として亜炭を使用していた。s氏の自宅ではアタンを使用したことはなく、子どもの頃（小学5年生で当地へ移住）、つまり昭和30年代後半にはすでにプロパンガスを使用していた。「ああ、子どもの時だねえ。うちもつとあの前は下にあったんですよ。そこのあのこずっと下がった、そっから入っていけるんだけど、そこの隣の家（t家）がねえ、風呂を焚くのねえ、アタン燃やしてたよね。で何かどっちだかなあ、この下掘った跡があるみたいだね。オレも見たことないんだけど、あの、何か掘ってたみたいだよ。この下どっかに穴あるって言ってたね。」「天日干しみたいのやったんじゃないのかなあ。うん。昔なんか土なんだったよね。うん。

（用途は）燃やすためにね。風呂以外は見たことないね。昔はどうだろう、土間もあったし何か燃やしたかもしないね。あの、カマドのあったウチはね。オレは子どもの時はもう、ガスだったからね。プロパンだったから。ウチでは使ったってことはないよね。tさんも死んじゃったから、そっちのほうに何か引っ越した…火事になっちゃったんだよね。アタンが原因だかわかんないけど。そっちのほうに何かリング園があったんだけど、そっちのほうにね、何

かウチはあるまだお母さんまだ生きてるから。あのtさんの奥さんが。生きてるから。」

その他 実際に見たことはないが、周辺の下の方にどこかに穴があるということを聞いている。

(2016年8月27日取材)

※④⑥⑦は欠番

(2)高瀬川中流 旧天間林村天間館(原久保)・野崎(狐久保)

④天間館(原久保) u氏 昭和13年生(78歳) 女性

定義・分布・質 湿田をヤチタと言ったが、シギボを採ったという話は聞いていない。「ヤチタ、とぬかる場所ではそう言っていたよ。そういうの採って乾燥させたっていうのは聞いたことがない。うんと歳とって90にもなる人(この近くには)いねんだもの。いや、そういうのは知らないよ。聞だ時やねすか。もっと歳いった人だらわかるんだけど。ぬかれれば入れねっきゃ。そご豆植えてるけど、あそごちょっと雨降っても入れねよ。ちっちゃい田あってね。そういうの採ったつのは聞いたことないよ。今でも雨ふればぬかって歩かれない。ナシロ作ったところで、入れないよ。」

現在、豆畑になっているところが、ヤチタだった場所であり、ナシロにしていた。「札立てておくでしょ。それ立ってても持って行ってしまいうんだよ。カラスの巣だよ」「ぬかる田はヤチタだからだと言ったけども、そういうの採って乾燥させたというのは聞いたこともないし、見たこともない。おじいさん90歳で亡くなったから、何でも知ってる人だったけど、私は聞いたことないよ。」

(2015年7月4日取材)

④天間館(原久保) v氏 昭和29年生(62歳) 男性

呼称 シギ(グ)ボと称した。

用途 v氏は、シギボという言葉自体は聞いたことがあるが、利用したことはない。また、過去に利用されたという話も聞いたことがないという。「シギボ(という言葉)は聞いたことある。濁点が付いて、濁らかして『シギボ』(アクセントは「シ」に置かれる。「ギ」は「グ」との中間の音)だって。」「(しかし)乾燥させてやったというのは聞いたことない。我が家の田んぼにも、大変だの。機械が入らないで。(しかし)そういう(シギボを採ったという)田は俺は子どもの頃から聞かないし、見たこともない。それ取り出して何かさ使ったとか、聞いたことない。掘り起こしたこともない。」

定義・分布・質 ヤチタは所有する田の1割程度だったが、機械を入れられないので苦労が大きかった。ハセ(稲架)は、ぬかるみでは固定できないため、田の中ではなく田のクロに作った。そのため、田の外まで稲を担ぎ出すテマが必要だった。しかし、ヤチタからは良い米が穫れた。v氏は、家の田が堰に沿って細長い田んぼだったため、水が浸透しやすかったのだと考えている。「田植えのとき、シロカギするたなであって、ぬがってとにかぐすごい。そのくらいズボズボ入って、ひどいところ行くと、耕耘機の時代だと、下手に行ったら抜け出せないというところだった。水が湧いてるような状態なのかな。そういう田んぼに限って、不思議と米はいいんだよ。ただ、大変。機械が入れないから、全部手作業。棒立てて、台風とか来れば倒れてしまうから。ハセをクロに作って、担ぎ出して、ハセを作って、そこまで担ぎ出して、我が家にもそういう田んぼあったから、大変だった。1割もいらないな、(家の田が)一町歩ちょっと、(そのうちの)1反3畝くらい。不思議と、クロひとつ、畦ひとつで、隣の田はぬかんなかったり、微妙なんだよな。同じトリ(通り)だったけども、細長い田んぼだったけども、そのあたりが、ぬかってあったんだけど。客土って、固い土を入れた人もあったけども。この堰があるでしょ。これのためかもしれない。その辺りがどうしてもそうになってしまうの。どうしても水が行きやすいんだよね。そこも一生懸命赤土入れて、客土して、よくなったな。土壌がどうしてもシギボだったから、そうなったのさ。」

(2015年7月4日取材)

⑤天間館(原久保) w氏 昭和15年生(76歳) 女性

居住の経緯 昭和34年に当地へ嫁いだ。

呼称 シギボと言った。

定義・分布・質 シギボとは、「網のように隙間のある土」であるという。「シギボってば、土がね。網のようになって、普通の土は何ていうあ、隙間がないでしょ。それは隙間があってね。そういう土でね。」

固い田をカメダといい、ぬかる田をヤチタと言った。後者にシギボがあった。w氏の家の田にはなかった。「固い田をカメダ。ヤチタにはシギボがあった。今は開田して畑にしているからね。昔の田んぼはそういうのだった。シギ

ボがある田んぼもあれば、ない田んぼもあるからね。いやあ、うちはずっと掘ったらシギボになってるかもしれないけども、どんだかなあ。うちでは（使ったことは）ないです。田んぼ作るにぬかるんだもの。ほんとに困った土だったの。固い土入れたり、客土なんかして、昔の田んぼ小さくて、そういうの土入れて大きくして、今こうやっているんですよ。うちのほうは特に耕地整理ささってない田んぼだし、自分で大きくしてね。」

用途 自分の家の持山から採ってきたマキを使用して、炊飯は炉でおこなった。

その他 「ここの部落は、天間林でも田んぼがある部落」であったので、米ばかりの飯を食べることができたという。
(2015年7月4日取材)

⑤ 野崎(狐久保) x氏 昭和2年生(89歳)

居住の経緯 実家のある鳥谷部から花松の男性に嫁ぎ、花松で暮らしていたが、昭和24年に現在地に入植した。ここは戦後に軍馬補充部が廃止されたことにより、放牧地であった地域につくられた13の開拓集落のうちのひとつである。『天間林村史』によると、土地は痩せ、気象条件も悪いため、当初は食べる分にも事欠く状況であった。また、住宅は「2～3間四方の小屋」で、雨漏りがするので傘を差して食事をし、冬は布団が雪だらけになったという⁴¹⁾。

x氏は、実家のある鳥谷部集落にいたころ（戦前戦中）、松根油を製造するためだろうか、松の根を掘っている光景を目にしたという。「88（歳）だもなんてなあ。何回あったら時代越えだもんだんだが、開拓さ来てこごまでたって、建物たでるてばよ。ほんとにほんとに。開拓でハア、戦争帰りのオジんどあ、余ってら時期（じぎ）だんだもの。戦後だのお。結婚したの。天間のウチがらね、ハナマツ（花松）づどごさ。わたしは実家鳥谷部（とりやべ）だの。そいてホレ、まあ、次男だんだが、アレさ、嫁っこに来たら何もねんだものこったどごさヤグバの人だんだが、国の人だんだが、開拓バゲデけて。そやって、こやって土地もらって生きだのえ。」「んだってあの当時あ学校さもむんじゅぐ（満足に）に行がねえなあ。なあに、いくさいくさって、何がら、でったもんだんだが、んだすけ今でも思い出す……あのへば、マツネッコ（松の根）掘って、マツネッコがら何取って、ほの国のために使ったもんだんだが。マツネッコ掘るってあの、ズッカにいるずぎんどあワゲのんどあづばって（集まって）、これまあ、国さおさめえず、って、なも知らねがべし、ありたごどあってったの。ちょんど、20がなんぼのづぎ、まげだんだもの。戦争。」

定義・分布・質 シギボとは、「草の根が腐ってムススとしたものが重なったもの」であるという。「シギボ田なんて、話は聞いてだけでも、シギボったら、草の根の腐ったムススづ重なったんでねの」「シギボづのはどういうヤグワリしたんだがどいう、まあ、地層だんだがこのな。ツヂよもだへだんだが、それはしらねおん」

花松集落で暮らしていた頃に作っていた田は、ヤチタであった。水持ちの悪い田のことをシギボ田と言っていた。「オラ今田んぼしつけでねんだもの。花松のほにいどころはしつけであったんだけど、長沢さ行くこのドロ（道路）の、ちょんどあのめの坂がね、ヤチタであった。ヤチタは、はあ、なぐなってるみたいだな。もどはなあ、ナガクツ履いで植えてたって、今そういうふとねなあ。シギボ田なんて、話は聞いてだけでも、シギボったら、草の根の腐ったムススづ重なったんでねの。60年前の話だもの。今は歳とったつきや何、はあ、どなったんだか。ヤチタしつけだのは記憶ある。水むったりなして、ま、ほれ、水もちわりのシギボってへったんでねがな。悪いのをシギボ田だってへったんた気するんだよね。」

用途 山や沢からマキを採ったり、木の根を掘って乾燥させて燃料とした。開拓で移り住んだ当初は、水も電気もなかった。「燃した燃した。水もねがべし、電気もつがねべし。山さ小屋こんたの建ででくらしただもの。山、そこの沢がらマキとって。そやって空き地あったどごほれ、耕したりなして。沢このしらこんどにほれこう山こあって、ムガシの人だったって木つけだなんだあ、ハア、自分だちあここの番地もらってんだもの。そごらがら採って。生えでる木ネッコ掘って干して燃やして。水もねえ、電気もつがねえ。開拓時代、まあ戦争終わったづぎあみなでったんだもの。どごのむ（村）、こごの、でまのちだってなんぼブラグってあるべえ。あつのほう、ソウツイ、ソウヅイ（蒼前のことか）のほう。ソヅイデエ（蒼前平のことか）あれあ、おつきぐあれす。おらんどあショジテ、ショヂテイって。そでも幅ふるい（広い）どごであつはなあ。こごど違って。」

(2015年7月4日取材)

(3) 小川原湖西岸（鶴ヶ崎、舟ヶ沢、田ノ沢、浜台、中志）

⑥ 東北町鶴ヶ崎 y氏 昭和20年生(71歳) 男性

呼称 シギボと称した。

定義・分布・質 利用したことはなく、「邪魔になるだけ」「邪魔者」だという。このあたり（小川原湖西岸周辺）には結構分布しており、10～20cm程度の層があったという。田のぬかる場所にシギボがあり、客土をおこなった。「あったあった。（使ったことは）ないないない。ジャマになるだけ。（肥料にしたり、燃やしたり）ないないない。ジ

ヤマになるだけだ。タボ（田んぼ）ぬがるだけだもの。使わない使わない。（シギボを何かに使ったという話は）ないない。ジャマものよ。（シギボはこのあたりはけっこう）出るな。厚さはやっぱり10cm20cmあるな。田んぼだら客土するけど、あどはしない。」

（2016年5月1日取材）

㊤東北町舟ヶ沢 z氏 昭和18年生(73歳) 女性

居住の経緯 20歳で上北町から嫁いだ。いつも犬を連れて小川原湖畔を散歩している。

呼称 シギボと称した。

定義・分布・質 z氏によると、シギボとは、沼（湖）端に波に寄せられて溜まる海藻のことであり、沼を汚す「ゴミ」のことであるという。魚の生育にも悪い影響を与え、また漁の際に網（チカ＝ワカサギやシラウオを捕るドウアミなど）にからまって障害となるため、一年に何度か漁協が取り除く作業をするという。「シギボ（シにアクセント）だてなんが青草だがでどろっとした。あつのほ（南）のこう沼ばだに、こごらへんだばの。1回が何回がああ漁協のほうで掃除したんだいの。シギボだって。青草みたいなので。沼が汚れるがら。サガナがまぐないてので。住みやすいようにきれいにするために。何回が掃除したごどあった。今年はやらないでらけど。岸に押し寄せで、波に押し寄せでこう、あがってるんだよの。シギボって。田んぼの下がらだば、いだごどはない。沼ばだにあるわけ。海藻みたいな、海藻干したみたいな。波に押し寄せでオガさ上がってるのがボフボフって。沼を汚すあれだもの。ゴミです。」

その他 20歳の頃（昭和37～38年ころ）には、カマドを築き、ツバガマで炊飯をした。それよりも小さい頃のことは明確に思い出せない。マキを燃やした。シギボを燃やすことはなかった。

（2016年5月1日取材）

㊦東北町舟ヶ沢 α氏 昭和25年生(66歳) 女性

呼称 シグボと称した。

用途 利用することではなく、捨てた。「（シグボは）捨てた。土が悪いから、畑とかやっても作がいくないから、誰も使っていないなあ。」

湿地に赤土を入れて田地を改良した。「水が下通ってて、ぬがって、黒土だどごで、アガツチへだの。ぬがるどごで、田んぼやってもダメだどごで。」

（2016年5月1日取材）

㊧東北町田ノ沢 β氏 昭和9年生(82歳) 女性

居住の経緯 19歳で当地に嫁いだ。田畑と漁の「両方」を生業としてきたが年齢的に難しくなり、一昨年から稲作をやめた。現在、子どもがシジミ漁に従事している。

呼称 シギボと称した。

定義・分布・質 β氏にとってシギボは「草の根というか、ワラを腐らせて干したようなもの」であった。シギボを採掘したり、取り除いたりしたことはなかった。利用したという話は、聞いたことがない。「いやあ、それ（シギボを利用したということ）はわかりません。それは私聞いたことないです。自分もやったごどないし。まあ、田んぼにはあったんだいの。草の根っていえばいいんだが、ワラを腐らがして干したのみたいなかたちですよ。」

昔は、踏み込むと水がしみだしてくる「シギボ田」で稲作をおこなっていたが、のちに家の山から赤土（カベ）を運んで客土した。「全然知らない。私昭和生まれだもの。シギボ田って田んぼしてあるんだけど、はあはあはあ、だっておらほんた去年おとしがら田んぼやってないどごで、草ばりだねす。シギボ（アクセントはシ）づのは掘ってみないかわからないです。出で来ました。今カベ（赤い土）へでいい田んぼにしまったんだけど、昔はそうだったの。んでこう、ざっと平（たいら）になっても足踏むと水がしみでできたんだいの。シギボ田ってハア、それだそれだ。わたしだち自分の山がらあ、カベ、あがいツチ崩して配って、ならして、へで何年かシジゲだんだけど、年とったどごでやれなくなつて。息子はせあ、あるんだけどシジミ（ジにアクセント）採りに出でるどごで。」

（シギボは取り除いて捨てることなく）いやいやそのまま。耕して。カベ（赤い土）いれなくてもムガシはそうやって田んぼつかったんだけど、あの、ひこむだいいね。ソゴがないがら。それでわだしだちあの、客土して、それでいい米とれでだんだんども、今もう80過ぎだがら、働けなくなつて今はもう田んぼシジゲでないの。」

（2016年5月1日取材）

㊨東北町田ノ沢 γ氏 昭和20年生(71歳) 男性

呼称 昭和20年生まれのγ氏は、シギボという言葉聞いたことがある気もするが、わからないという。「シギボ

って聞いたことないな。あの……シケる田が？聞いたことあるようなないような言葉だね。確か言葉は聞いたようなことがあるんだけど、中身ははっきりわからないですね。私より更に上の方は知ってると思うけど」

用途 電気が利用できるようになってからも、マキストーブで炊飯していた。ロバタでは鍋を用いて調理し、カマドでは「坊主鍋というか、ツバのついた釜で」炊飯した。カマドは2つ鍋をあげられるもの（二口竈）で、左官屋が作った。カマドをしつらえたのはッ氏が小学生のころ（昭和20年代後半以降）であり、それ以前はロバタで炊事をおこなっていた。（2016年5月1日取材）

㊦ 東北町沼添（左ノ平）、通称浜台 δ氏 昭和9年生（82歳）男性

居住の経緯 当地（浜台）で生まれ育った。昨年まで田を作っていたが、今年からやめた。

呼称 シギボと称した。

定義・分布・質 シギボとは、「草の腐ったもの」であり、「何にも使うことのできない」「邪魔なもの」である。田の下にたまっているものであり、昔はたくさんあったが、利用したという話を聞いたことはない。「シギボ？うあ、あのぬがるとごが。ぬがるとごだばろ、あの田んぼんどあズバリある。（利用したという話は）ああ、それは聞だごどねなあ。うん。だいたい、あの草の、あの、アレでねが。腐ったやづでねが。（このあたりで、何かにそれを利用したという話を聞いたことは）ないない。」

田の下にシギボがたまっており、土を入れても別の場所からまた出てきた。田を作るときには、シギボを取り除かなければ田を作れなかったの、除去した。「（田んぼは）去年まで作ったどもこどしはやめだ。（昔はかなり）あったあったあった。（田んぼ作るのに）ジャマなもの。けっきょくあの、何てのう、下さたまってるのよ。んああ、もろみになって。それだからこだアレせばまだ脇さ出るんだいな。ああ。あのツヂうごいでいげば。（取り除くことは？）田んぼづぐるどぎはそれ抜がねば田んぼになんねもの。ぬがって。うん。捨てるづより、そこから採ってどっかさなげねばね。うん。（使ったことは）いやあ、なんさも使えねえあれあ。」

用途 現在は、濡れたウェットスーツを干すためにマキを燃やしている。灯油では火力が弱いので、マキがよいのだという。炊飯は、炉に自在鉤をかけ、鍋でおこなった。ガスが使われる少し前に、カマドを使ったこともあった。しかし、シギボを燃料として使用したことはなかった。「今もオレけっきょく、沼（小川原湖）入（は）てるがら、ほらしチ（ウェットスーツ）とがぁいの（あのようなもの）濡れべえ。それ乾がすにこれ使ってる。うん。あの、油ではちょっと、木でねばダメだ。（火力が）強いがら。」「（炊飯は）ロブヂで、カギツギにナベかけで。竈は、ガシになるちょっとめに使ったどもう。シギボを燃やしたこともない。」いま、マキを切っているところである。

（2016年5月1日取材）

㊧ ε氏 六ヶ所村倉内（家ノ上）、通称中志 昭和13年生（78歳）女性

居住の経緯 東北町から20歳で中志（ちゅうし）へ嫁ぐ。

呼称 シギボと称した。

定義・分布・質 シギボとは「柔らかく、軽い土のようなもの」とであるという。利用することはなかった。「とねとね（採らない採らない）。田んぼよぐあの、シギボだって田んぼどがって掘れば、何、柔らかいツヂが。軽いツヂってがそういうの、あったんだよ。ああ、何十年もやったごどねがらな。」（利用することは）いやいや、そういうごどはないな。そごらの人どあそういうのはやらねな。（肥料にしたこともない。）」

40年以上前の話であるが、田を掘るとシギボが出た。稲作に不向きであることから、ツヂガベ（赤土）などを客土した。

「（田んぼには）ううん、よぐねえの。うーんアレ、新しいツヂガベどが、そういうツヂをまだ入れて耕してな。山とが（から採ってきて）。（シギボを利用したことは）そういうことはないな。客土して。田んぼ。やったなハア、もう40年も前だがらな。もハアやめでまったすけ。」



中志（ちゅうし）

燃料・炊事 ε氏が幼少のころ、つまり戦前から戦中にかけては、炉にマキを燃やし、鍋で炊事をおこなった。その後、マキストーブの上に鍋を載せて炊事をおこなうようになり、のちに鍋から羽釜へと変わった。ガス釜を経て、電気釜を利用するようになった。「炊飯は、ストーブさマギ燃して。ホントのちしゃいどぎは、あの何てらば、イロリにマギでナベツルあるナベに。ロブヂ（ブにアクセント）でな。だんだんに今度炊飯器どが（マギ）ストーブの上で（ナ

べを載せて)炊いだり、釜でなぐナベ。それがらあのツバのついたナベが流行ってツバガマでご飯炊いだり、だんだんにガスの炊飯器どがそういうのが流行ってきてな。今の電気釜になるまで。」

(2016年5月1日取材)

(4) 補遺

㊟大浦(境ノ沢)と氏 昭和9年生(82歳)

※上野地区の人々についての話であることから、「3 整理と考察」では、上野の事例として扱い「上野㊟」と表す。

居住の経緯 と氏は境ノ沢(東北町大浦境ノ沢)で生まれた。現在は上野に住む。「(住まいは)今はこっちだけど、実家はサガイノサワ。でも実家はサガイノサワだから、子どものころ(見た話)。」

呼称 シギボと称した。

使用年代 と氏自身の家でおこなったわけではないが、小学生のころか中学生になるかならないころ(つまり昭和10年代～20年代前半)に他地域の人がシグボを採掘して利用している光景を見た。「いや、ウチの実家はやねがったけど、他所の人やったの見で覚えでる。ちせ子どもの頃ね、小学生のころ。」「そしたどごで燃やしたりしたのはわがる。まだワダシも小学生の頃かなあ、でも中学生にもなるだがらねが」

定義・分布・質 と氏は、同じ田でもシギボのとれる田とそうでない田があったという。と氏の出身地である境ノ沢(東北町大浦境ノ沢)や隣の才市田(東北町大浦才市田)の田(西側)にはシギボがなく、上野(東北町上野)の田(東側)にはシギボがあったと記憶している。ちなみに、大浦明堂向の昭和11年生まれ的女性も、上北町方面の田は「ヤヂの田」であり軟らかいが、才市田の田は「カメタ」(しっかりとした地盤の田)であったと語っている(大浦㊟)。「シギボたらあの田んぼづがあれ、でしょう。やあ、ちょっとこういうウエ(家)では使んながったけど田んぼどがどにあの田んぼさシゴドしに行けば、あいう、どれくらいずがに(いくらかずつかに)切って乾がすて、乾がしたのよ、マギがわりに燃やしたのよ。うんそれはわがるけど。」「その田んぼによって、そのシギボづの採れる採れねえづのがあったもった。であそごに広いへギ(堰)づが田んぼに水持って来る広いへギがあるでしょ。あのサガイノサワがら下がったどごの小屋づがあれが建ってるどごに、あれのこっちからそのシギボが採れたの。こっちがわのほう何も採れねがったもの。そっちのほうの主(おも)、ウワノの人の田んぼだったんだよね、でこっちがサイヂダどがサガイノサワの田んぼだったが、こっちがらは採れるって言わねがったけど、こっちのほうは何かもどはヤヂみたいない感じでったみたいで。田んぼじゃなくて、ウヂおべだどごこっちはもう田んぼでったけども……。」

入手法 と氏は、上野の人々が田から直接採取している光景を見た。

採取の目的 シギボは「マキのかわり」であったという。

採取の時期・場所・主体 境ノ沢や才市田の人々はシギボを採掘することはなかったが、と氏が境ノ沢の田に向かう途中、上野の人々が田からシギボを採掘している様子を見た。「いや、ウチの実家はやねがったけど、他所の人やったの見で覚えでる。ちせ子どもの頃ね、小学生のころ。ムガシあの田んぼのあれよ切ってね、そてか、濡れでれば燃えねえがら乾がして燃やして、マギがわりみたいにして。やあ、どのあたりってればいいべなあ。上野の下のほうなんだけど……(手長のほうですか)そうそうそう。手長わがるの。」

乾燥・運搬・保管 と氏は自家の田へ行く途中、上野の人々が小屋に積んで乾燥させている様子を見た。「田んぼさ、サガイノサワ、ま、田んぼさ行ぐ途中だがら。うん。燃やしてらの小屋さ乾燥させで、積んだりしてらの見だりもしてらの。」

用途 と氏は、上野の人々がシグボを燃やしている様子を見た。屋外での農作業時に暖を採るため、田や作業小屋の中で「マキのかわりに」燃やしたのだという。「サガイノサワの下がるほうあるでしょ。あそご下がれば水揚げるあれの小屋があるでしょ。あそごで燃やしたのわがる。水掛ける小屋みたいだのサガさ上がればすぐ。あそごにあの水揚げる人が管理してる人が燃やしたのわがる。」「あの辺のアレが、多分そのアレ、シギボに田んぼがなってるんだと思う。家でだば燃やしねがったと思う。エで燃やしたのは見だごどないんだけど、(田んぼで燃やしたのは)何ての、寒いときのあったまる。マギのかわりに燃したがら、私覚えだのは田んぼとかその辺だがら田んぼのナガにある小屋とか、あの百姓の人がたが休む小屋も作ってあったさういふどごで燃やしたりそれどウヂで燃やしたのは見だごどねえ、そしたどごで燃やしたりしたのはわがる。まだワダシも小学生の頃かなあ、でも中学生にもなるだがらねが、まさういふ記憶はあるけど、ウヂで燃やした人もあるがわがねけど、ウチの実家は燃やしねがったけど」「(サガイノサワには)今へでもほら、何でもいっばいリョウゴイン(上北療護園・東北町大浦境ノ沢6-1)どがいろいろあるんだけど、私の子どものころは6軒よりながったの。サガイノサワで、子どもの頃(上野のほうの)田んぼさ下がったりなんかして見だり、燃やしてらの見だら……。」

その他 と氏にお話を伺った当日は、この地域の秋祭りの中日であった。夜にはねぶたの運行が予定されていたが

「バングだばではてぐねもんな。それより24時間テレビ見で」（夜は外出したくないですものね。それよりも24時間テレビをみて（過ごしたいです）」と語った。

（2016年8月27日取材）

㊦ 上北町（上野〔低地〕）η 氏 昭和8年生（83歳）女性

居住の経緯 昭和27年、十和田市牛鍵から19歳で当地に嫁いだ。

呼称 シグボと称した。「なんてオラんだあシグボだって。へって。」

使用年代 昭和27年ころ、嫁ぎ先では使用していたが、それから20年ほど使われなくなった。つまり、昭和47年ころまでは使用していた。「いや（嫁ぎ先では）前からあの、舅さんだちあ使ってやってで、たどごで、使なぐなつてがら30年…40年…オラ嫁に来て20年のづぎつかったったな。これ掘って」「何40年…使ねふなてがら40年…なるなあ。うんと、19がナンボで嫁に来て……ま40ぐれも、40になるならねにでもやめだったな。」「うん。でハア、つかなくなつてがら何年なべなあ。オラあ来てがら65年…になるしけ、30年ぐれになるごったな使なぐなつてがら。」

入手法 採掘することで手に入れた。

採取の目的・理由 サンバヤチ周辺は木立に乏しく、燃料の入手が困難であったから利用したのだと語る。「夏は使わない」と言っているが、η 氏本人はシチリンの燃料として利用したということから、この発言の趣旨は、夏場に全く使わないということではなく、主要な目的が冬季の暖房であった、というものである。「で、ま、今だらガスだのなんだべったってそのあたりマギもそうねがったんだよあんだどご（あのような場所）でホラ。だどごでそれをハあ、まあ、夏はせ使ねたて冬、ハア、12月12月がらはずっと使うよにたぐうえで（蓄えて）ホレ。」

採取の時期・場所・主体 サンバヤチでは、集落の5軒ほどがみなシグボを使っていたという。η 氏は嫁ぎ先の舅にならい、自らも（つまり女性も）採掘に携わった。4月ころ、湿地から採取した。すでに田となっている場所から採掘することはしなかった。（私自身も）「やった。やったやった。わ、嫁に来てあたりあオラもやったった。」「こごらへんの人だちあんだホラあの、掘る場所もねがったどごで、その、ずっとこれ真っ直ぐ行つたほのずっとそれこそ何したほで（サンバヤチ方面）、だば、オラホのまわりの人だちあんだ何人がほれ、で、サンバヤチのほうで。」「すぐ隣だ。やっぱしサンバヤチで5ゲンぐらい使つたんだ。それこそ嫁に来てほれ、おじいさん、シュウドサンがほら、あつたどごで、ほで。」「田んぼって、田んぼになつたどごでなく、あの、何てべな、ヤチみたいなどごがら採つてきて、使つたべ。」「な一つ頃、春、春、3、4、たて4月頃に掘って（その後、乾燥させるために）重ねどいで。」

採取法 タヂで切り込みを入れ、モッタで起こし、起こしたものにタヂで切り込みを入れて、縦横30cm×15cm、厚さ5cmほどのレンガ状に成形した。「何てばいんだこの、レーガみたいにな。厚さがこれぐれにして、こう、30センチの、15センチぐれにこうやってこれをこうこうこう重ねで乾がしてうん。へて乾がして。幅が15cmぐれだと思うんだいの。厚さがうん、あまり厚ぐなぐ。まっとこのぐれ（5cmぐらい）あつたな。」「あの、こう、それこそ今せあれしねたて田のへぎのあのほどりをこう、切るの、クロ切るの、タヂ、あれでこうほれ、こうまキズつけでこだモッタでこつたこうやって、モッタで。うん、でこつたタヂでこつたほれこうガパッとほれ掘つたのこつたこう、田にあげおいで。（モッタで起こしたのを）それをガパッとこたタヂでまだタヂでこうキズつけだのだモッタでやってそれさあげだのまだタヂでこう。」

乾燥・運搬・保管 上記のように切つたものを、重ねて乾かした。春先に掘って乾燥させたものを乾いたころをみはからって家に運び、雨に当たらない場所で保管し、冬に使用した。掘り採る際にあまり厚くしないのは、乾燥しやすくするための配慮であった。「こうやってこれをこうこうこう重ねで乾がしてうん。へて乾がして。」「厚さがうん、あまり厚ぐなぐ。まっとこのぐれ（5cmぐらい）あつたな。乾がして。うん、乾がさねばほれ燃えねがべ、な一つ頃、春、春、3、4、たて4月頃に掘って重ねどいでこた乾げばみなほらウチさ運んでほら雨当だんねどさ置いて冬なればそれ。」

用途 「炭の代用品として」コタツに使用したという。ホコホコと暖かかった。また、「マキのようにボウボウと燃え上がらないから」火鉢の類いにも使用したという。η 氏の周囲では、ストーブ状の器具にシグボを燃やして炊事をおこなっていた家もあったという。η 氏は、シチリンにシグボを燃やして湯沸かしなどに用いた。また、η 氏の舅は木材工場に勤めていたので、ミミシリ（端材）の入手が容易であったことから、シグボと併用した。周辺の人々は「みな木材工場に勤めていた」という。近所のR氏（上北⑬）も同じ工場に勤め、移動製材をおこなっていたという。R氏が移動製材を行っていたことについては、E氏（上野⑤）からも聞いた。今回の聞き取りで、シグボを使用していた人々のうち、製材所に勤めていた人はR氏（上北⑬）、V氏（上北⑳）、η 氏（この項）の3名にのぼった。いずれも、ミミシリ、ジャッパといわれる「端材」をシグボと併用していたようである。山際から離れた、低地の真ん中にあるサンバヤチ周辺に暮らす人々が、燃料の入手に苦心していたことが窺える。「燃やした。マギ…何てへばい。シミの代わりに、コダツあも入れだんだ。こごら辺のマヂのだいたいこの裏のほんどだば、オラんどもほれ、田んぼ

に××んだもの。それをコタツさあの、ドンとほってれそさ入れて、へて炭やねでそれ使ったべ。」「コタツさ入れて、アグずつとこう掘ってれせて入れて、使ったの。ホコホコってさ。」「いやあ、それをやっぱし火付ければあのマギみたいにボウボウボど燃えねどござずかん（時間）がかかるどござ、なんかほら、に、にじ、にまあ、火鉢のみんなのさ入れて、使ったりなんかこうやるけども。」「ご飯炊ぐのあそれなりの何てけなあ、ストブみたいだのが、さ入れてご飯炊いだ人もあったななあ。（炊飯のストーブ様のものにシギボを入れて）そうそう。オラホでだばあの、へ（それ）でやんながった。（炊飯のストーブというのは）ヌガガマみたので。うん。」「（私は炊飯には使用しませんが）ヒバチでばいいがな（ヒバチというよりも）シジリンさ。ホラあれしてあれ。お湯なにちょこつとホラすぐアレ（するのには使用しました）。」「（シギボだけを焚いていたわけではなく）マギもほら。オラほのおじいさんどああれ、コバ（工場）がら。あージャッパあれ。ハゴのジャッパれ、ミミシリってアレ、こう細いのあったのアレ。あのハゴのイダの何て、ハズ（端）のアレしたのば、へて。」「オラホあそれこそそごのコバさありてたの。いやあ、いやコバて、コバさほれ、どでもあそごらの人だちあみなありてたの。勤めで。××（R家）のおじいさんなんてけ、自動式だつてんだがこうどござでもあれこう、ありて頼まれでありたどござ。持ってありたどござ。何がこして。」

操作 シギボは燃え上がるものではなく、穏やかに持続するものであったという。そこで、その特性を活かした利用の工夫があった。「それをやっぱし火付ければあのマギみたいにボウボウボど燃えねどござずかん（時間）がかかるどござ、なんかホラ、に、にじ、にまあ、火鉢のみんなのさ入れて、使ったりなんかこうやるけども。」

その他 〇氏はかつて、出身地の田で大きなナマズをよく見かけたという。しかし食べることはなかった。「生まれは十和田市に近い地域（牛鍵）であったことから（筆者注：文脈から推察するに、田舎とはいえ都会に近い場所であった、というニュアンスである）、そのような習慣はなかった」と語る。「ムガシへばその裏もまだあれえ、今みんな道路でもねがったべし、ああ田んぼさ水かがるどぎになればナマズづのあ、こったナマズばりいであつたんだ。今だば見てふてもなめめねたてな。（ナマズは）食べない。やばす慣れだ人だら、いがべたて、オラやばすそつの十和田市のほでアレした（十和田市方面で育った）どござそたにな。十和田市てたて、それこそ上北町と十和田市たて牛鍵だのはやかがつてればこしたげんだのい、なもそれこそ10分が5分あれば行ぐんだもの。」

（2016年8月27日取材）

⑥ 上北町（上野〔低地〕）〇氏 昭和7年生（84歳）女性

居住の経緯 生まれも育ちも現地である。24歳のときに徳万才（上北町大字大浦字徳万才）の男性と結婚し、自らの実家のすぐそばに居をかまえた。「生まれる時から84年こごにいる。（嫁に）行ったんだけども、こごに住んだの。ま、24歳に、徳万才（とくまんざい）つうどごの人と一緒にあったわけ。で、今度その人がもう次男、次男でねえ五男だったどござ、どござでもいがったわけ。だからこんだこちさ来て、実家の、実家がそごだけどね。で。実家はね、そごの新聞（販売店）、×××（公衆浴場名）あるでしょ。あの隣が。で、実家がそこで、私こごだから、田んぼ後ろだし。」「でもね、こごで生まれでこごで育って84年、84年85年さ足なんぼか入ったどござね。昔昔の、今のごどはあまり知らないけど、むかあしのの、手で、働いだどぎのごど、今機械でやったのはあまり知らないしね。」「こごで生まれでこごで育って、一歩もソドさ出だごどねえし。あのなもわがねの。」

呼称 シギボと称した。

使用年代 結婚した昭和31年より少し前ころまで、実家でシギボを採掘し利用していた。「いやあ、なんぼだべ。大概、の年頃まで、たんで嫁になる前にやったがらね。何歳ぐらいまでやたげがなあ。それまでちょっと記憶ないです。」「その頃（結婚した24歳のころ）はもうシギボ採るのはオラののウチだば田んぼながったどござそれは大体終わってだと思ひます。（採っていたのは）小学校から、ずっとこう。だいたい、そのぐらい（の時期まで採掘していた）。31年に結婚してるがらね。うん。その前はウチでほら、いろいろやってその前にはもシギボ掘るのは終わつ、オラホの田んぼはながったどござ、終わつたつたと思ひます。」

定義・分布・質 シギボは湿地の下にあり、「木の根というか草の根が密集しているもの」「土の含まれない木の根ばかり（のもの）」であるという。「そのヤチの、木の根、つつんだが草の根、つつんだがね。それが密集してで。」「そのシギボ、つぐつ、オランダがあ、あの、こご何、何ヤチつつんだがとにかぐヤチだたわけ。で、」「なんつう、忘れだもねえ、それをこだ下をね、木の根を採るわけ。それがシギボだったの。」「まあ、ホントになんつう乾げばね、軽一ぐなつて燃えるわけ。木の根ばっかりだから。ツヂもなくてね。木の根ばっかりだから。」

入手法 各家庭で採掘した。

採取の目的 シギボが広がっているために土が少なく、「稲作をするにも稲が育たないので」、角スコップで土をよけて「木の根」（シギボ）を除去することが主な目的であった。〇氏の話の全体から判断すると、田地の改良が主目的であり、後述のように（「乾燥・運搬・保管」および「用途」の項参照）、シギボは田の隅で処分するために燃や

されたようだ。その際に生じるオゴリ（熾火）を燃料として有効活用することはあった。

「（シグボが）密集してで、田んぼやるにも、米伸びないが、そのえ（上）さまあ、ツヂがちょっとあったったわけ。で、こんど、冬になれば暗渠とおすってね、これを掘って、んで、ある程度水はけよぐして、んで、こんど米作ったわけ。だげどもこのシグボののだどでツヂ少ししかないわけ。ごめんなさい今ワダシもの食べだどで（筆者注：θ氏は祭りから帰って今まさに食事を済ませたところであった）。んで、こだその冬になれば暗渠つうの通して、で、夏になれば、田んぼやる前とか、あの、に、そのこのぐらいのツヂ、もったいないが、こう、まあ程度こうやって、線つけで、で、角のスコップで、こうツヂよげで、でこんだあの、なんつう、忘れだもねえ、それをこだ下をね、木の根を採るわけ。それがシグボだったの。」

採取の時期・場所・主体 人を使って作業をさせる余裕はないので、家族全員で、家の田から少しずつ採掘した。θ氏は今でいう中学生のころから、つまり当時の国民学校高等科のころからシグボの採掘を手伝わされたという。「もっともとお話上手だんだらうまぐ教えるがもしれないけど、オラのウヂは貧乏だったどで、こう、いいあんばいに人使ってやるウヂでねえ（いいように人をつかって仕事をさせている家ではなくて）、自分のウヂで少しずつでもやったのだどでね。上手に話でぎないの。」「話じょんずだんどがね、もう、人使ってやってるウヂだばね、もっともと能率的だったがもしれないけど、私のウチはもう貧乏だが、家族で少しずつ少しずつそいふにやって。だが、夏も、冬も、こうふに春から秋まで。暇なし。貧乏暇なし（笑）。」「今で言えば中学校がな。そのぐらいから。やらされで、やったの。子どもの時から。だが今で言えば中学校のあたり。とにかくもう、この辺は全部そのヤヂだったどでね、ヤヂをこういう風におごしてやったどで。まあ、子どもの時からかせげるようになればね、手伝わせられだったわけ。だがまあ、説明はでぎないけど、体験者だわけ。それはね、体験者で、やったんですよ。」

また、シグボを盛んに掘ったのは、このあたり（サンバヤチ周辺）の人が多かったという。「シグボ掘るてばこの界限の人だちが多かったわけね。こごヤヂだったどで、ヤヂをみんな起ごして、田んぼ作ってるとどで。そいふにやって、今はもう、それから、ツヂね、ほら低くなるとどで入れだりしてだんだん田んぼらしぐなると今こうなったんだけど、ムガシはホントにこんなに入っただもの。田植えるって足こうあげば植えだ苗がこう寄るだけね、深く。それでもやっぱりやらされでやったので。」

採掘の時期は、春と秋、つまり田植えの前と稲刈り後であった。「で、夏になれば、田んぼやる前とか、あの、に（採掘した）」「（切る時期は秋と）春と。そう。田んぼの暇なとき。あの米やらないときに」「せばハこどしあこの田一枚、少しおっきげばね、春ど秋どってこう分げだりして。アレして。そいふにやらされだったの。」

採取法 およそ一坪くらいの範囲を目安として、タヂで切り込みを入れ、角スコップで厚さ10cm×1尺四方ほどに掘り採ってモッコで運び、畦に寄せ、積み重ねた。シグボを採った場所には、仮寄せしておいた黒土を返した。秋の収穫後には、再び黒土を別なところに寄せて、シグボを掘り採った。家族総出でその年々で採掘できる分を採ったが、1年におよそ「1反歩」ほどを掘るのが精一杯だったという。θ氏の家では5000歩（約16500㎡）の田を所有し、年に1反歩（約990㎡）を掘ったというが、この単位は数値として換算できるような正確なものではなく、非常に感覚的なものであったという。今年掘ると決めた田の一枚の面積が大きければ、春と秋にわけて2回採取することもあった。一枚の田のなかでも、シグボの集まっている部分が若干高くなっていけばそこからシグボを採り、また、シグボを除去するとその部分が低くなるため、黒土を移動させるといったように、水平を見極めて採取する場所を決めたという。冬場には、水はけをよくするための田地の改良をおこなった。田の上の雪を除き、木の枝を埋めて暗渠排水した。膝上までぬかったという湿田は、足を入れるとシグボのために痛かったという。

「そのこのぐらいのツヂ、もったいないが、こう、まあ程度こうやって、線つけで、で、角のスコップで、こうツヂよげで、でこんだあの、なんつう、忘れだもねえ、それをこだ下をね、木の根を採るわけ。それがシグボだったの。」「で、このその木の根とかヤヂだったどでね、いろいろその起ごすにツヂはもったいないが、こっさ寄せで、で、まあ、だ一坪ぐらいつづやって、こう、キズつけで、でそれを今度あのシカグにこう、やって、それを掘って、こう、積み重ねておぐわけ。で、それがこんだ木の根で、ツヂのながだどで、重いわけね。で、まあ程度シカグに採って、あの、あるぐどごさ、寄せどぐわけ。である程度のどご今年、これしかやれねえどもればそれ分やって、で今度それをずっとこの歩ぐどご、畦にね、こう、こう、なんつのがな、うん。あのシカグだのよ、こう積み重ねるわけ。こう互い違いにね。うん。で積み重ねで、ずっとまあ、この田んぼだらこの田んぼののさこう、積み重ねで、へって、それをハアそのままにして、今度、今までやったどごの、こごさその黒土をこう寄せで、少しずつ、あの、田植えで、でまだ次の年に、アギになって米、刈ってしまえば、まだその黒土を、こだほら、こっちのほうさ寄せでね、そして今度、やって、で昔は、今みたいに…私のウチはね、あの一輪車とかながったわけ。だがそれを今度四角いやあ、こう、四角いのあつてね、こさこう、い（柄）がついでるわけ。それでこう切って、（タヂですか？）あ、そうそう、名前も忘れだ（笑）。そのタヂづので、キズ付けで、でそれをスコップで掘って、で、まあ、積み重ねておいで」「そういうふうにしてつづつてね、んで、夏は、そういうふう、冬はまあ、夏はそのまま、まだ秋な

って米刈れば、まんだ今度、こだこっちの上のほの、ツヂばこんだこっちさ、こやって、でまんだこごこう、やって、で、タヂでそれこそタヂで、(タヂなどという名前は)忘れじゃった、それで切って、こう角スコップでね、こう、やって、で、テモッコに入れて、畔にずーっとやって少し乾けば今度こいふにしてね、今度風通しよぐして、もうそれはホントに。」……「もう切るのはだいたいこん、まあ乾けばせこなもでねもなべたておっきぐ切って、乾かすでごでね。んだねえ、だい、このぐれの1シャグ四方ではきがねがったべね。ああ……1尺ぐらいかねえ。あの、角スコップでこうすくって採って、今度モッコに入れて、ね、だってもでくてもでくても、なんぼも入らないわけよ。厚さはね、うんでもやっぱり10cmはあったんでねべが。このぐらいうん。でそれを今度ほら。こやってはじめはやって、少し乾いでくればこだこう、八の字にして。乾がして。うちの、うちの場合ね、そやして親がやらせられでったがら。やって。(切る時期は秋と)春と。そう。田んぼの暇なとき。あの米やらないときに。で、米、春はほら、どうしても、こう、耕さねばねえわけね、せば、このぐらい耕せばあどハハシグボばかりだわけ。せば米思うよでねどごで、まあ、毎年、この貴重な黒い土をこっちさ寄せでやって、そいふにして、やらされだの。今、むがし、今だあヘクタールだのなんてべたって、むがしだば、だいたい5000歩ぐらいがなあ、私のウチは、家族でやってだがら、で、それでやってもだがら1反歩やるてば1年がかり。うん。そいふにして、やった、やらされだつたの。だいたい(1年に1反歩)ね。あの、人手も借りでやる人もつといっぱいやったがもしれない。んで米の植えないとぎの、なんつの、ツヂあいできるとき。うん。で、ま春かな、春はやくかね、やって、こうえ(上)のツヂよせで、シグボ採って、畔に並べで、でこのツヂを少しく寄せで、まんだこんだこっちのののこつてののがらこう採って、やって、そういうふうにしてやってたんだね。だがらまあ…1年に、1反歩やれねがったもんね。(シグボを採るのが、1年に1反歩)そうそう。で、昔はね、1反歩の田ってねがったわけ。私まだ子どもで知らねどぎ。でも、このぶつつ(これくらい)でも1反歩、このぶつつでも1反歩だの。ハハ10反歩あるでば、10反歩だなんてそてしゃべるもんでねの、11町歩だなんてしゃべられだつたんだけど、だけども、ガッコの時代だつたがらわがねがったわけね。んで、こんなちっちゃいのも、せばハこどしあこの田一枚、少しおっきげばね、春ど秋どつてこう分けたりして。あれして。そいふにやらされだつたの。で、今最近こういうふうに農家のほうも進んできたり、何でも機械化されるがら、簡単にやるべけども、むがしは人手でばっかし。だがら、ま、結構やらされだ(笑)。そのなんつのがな、高いところ、同じ一枚のところで、木どいっぱいあつて腐ったどごあ幾分高いわけ。そのひ(辺)を見て、でもまだいたい、こっからこっちどがね、そでねば田うえられねんだしてね。ぽつぽつやれば。だがらだいたい、このひ(辺)がたがいなどもればこどしはこの辺、やって、来年がこっちのほうやったりね、そいふに、私のウチはそういう風にやってたの。で、せばほら、どうしてもこごシグボとった分、低いわけ。でもそれをそれなりに、農家の人だちはほら、こっちのほうがらこう、やったりして、この黒土こさ入れて、こんだやるいに田起ごして、やって。で、せばどうしてもこっちのほう黒土が多いわけ。せばこっちのほうこんだほら、っから引つ張られるどごで、こっちのほう幾分かツヂクロツヂ少なくなるんだよね。そいふに考えで、こう、やってあクロツヂこごまである、せばこごまでよげだほいつてこだそれを、黒土をいちいちよげで、スコップでよげで、そしてこんどある程度の面積にやって、タヂで、傷つけで、でスコップでくば、そごの畔にくばってね、そいふにやらされだの。今だらあいふにやる人ねべけど。で冬は冬で今度ほら、水はけ悪いどごで、暗渠ってね、こう雪かたづげで、ツヂ掘って、だいぶ掘ってね、こだあの木の枝とか、なんどがこう、入れるわけ、田んぼに。こう。そしてそのツヂを入れて、そすればこの、こごさ木の枝の入ってどごで、こさこうツヂどやっても、水はげいぐなってるんだがら、ツヂがほら。かがてでも。そういうふんたごどもやたつただえ。その木の枝も、とにいがねばなねべしね。でもそのまだ私子どものどぎ、今で言えば中学校ぐらいだどごでその木の枝どが木の束ね、その親だちやって(木を束ねるのは親がやった)。だがらその枝はほれ。まあ、結構やらされましたよ。で、それからほら、だんだん良くなって、ツヂ入れだりして。こう、今のこいふな田んぼになったけども。もう、こんなに(膝上まで)入るんだもの。だがら、あの、田植え靴とかってね、ウヂのほうはきがねがったの。とにかぐこご脱いでこごまで入らねばなんねえどごでね、あの、なんつうの、今だらなんてんだがね、ムガシのズボンの狭いやづ。こごまで、それを穿いで、そのまま入るわけ、田んぼさ。でも底はほら、それこそシグボだどごで、足痛くなるわけ。うん。そうふにして、やって今みんなこうふになって今度ほら、毎年ツヂ盛っていいツヂ持ってきて入れて、こうならして、やって。だがら、まだまだこごのヤヂはシグボ掘ればあると思う。あれみんな掘れねんだものね。今だらツヂ盛るがらね、うん、結構、いぐなつたべたって、ムガシそごのシグボを採って、ツヂ入れねばなねがったどごでね。結構、かせがせられだの」。

乾燥・運搬・保管 田で掘り採ったものを畦まで、相手がいればテモッコ(持ち手のついた運搬具)で、または一人でムシロを曳いて運搬した。今でいえばθ氏が中学生(国民学校高等科)のとしごろであり、シグボは水を吸って重たいので一度に多く運ぶことはできず、ムシロを曳いて運ぶ場合にはせいぜい5～6枚が限度であった。子どもにとっては重労働であり、「重いんだ、とにかく」とθ氏は回想する。リヤカーも使うことは使ったが、ムシロより2～3枚多く運べる程度であり、車輪がぬかるため子どもには困難で、重宝しなかった。掘り採った当初は、シグボは

まだ柔らかいので互い違いに水平に積み重ねてある程度乾燥させ、少し乾いたところにハの字型に立てかけ、秋まで乾かした。繰り返し反転させ、それなりに乾燥して小さくなったところに再び別の場所に積み重ねておき、夕方になると火をつけた。そして、くすぶるシグボの上に、まだ乾いていない別のシグボをあげて、乾燥させた。夜通しシグボを燃やしつづけ、明け方に行ってくすぶるシグボを取り上げると、オゴリ（織）になったシグボがその下にあった。そこに再びシグボをのせて、常時くすぶらせておいたのだという。

シグボの採取も運搬も家族総出の作業であった。θ氏は学校から帰って弁当を食べると、休む間もなくシグボの運搬を手伝いに行き、早めに切り上げたのちは忙しい両親にかわって家の掃除や夕飯の支度をしたという。飯炊きに失敗したこともあった。まだ子どもだったθ氏は両親から「こんどは焦がさないように気をつけなさいね。遊んでばかりいると、焦げるんだよ」と諭されたが、咎められることはなかったと語る。

「テモッコに入れて（運び）、畔にずーっとやって少し乾けば今度こいふに（このようにハの字に）してね、今度風通しよぐして、もうそれはホントに。」（シグボを）採って、今度モッコに入れて、ね、だってもでくてもでくてもね、なんぼも入らないわけよ。」「でそれを今度ほら。こやってはじめはやって、少し乾いでくればこだこう、ハの字にして。乾がして。」「それ（シグボ）をスコップで掘って、で、まあ、積み重ねておいで、こだそれをあの、私のウチは、そのもう、一輪車もなもきがねがったわけさ。深く、つぶれで。だから、あの、テモッコってわがんだいがないなあ。わがりますか？でそれさ何枚が入れて、こだ畦にこう、互い違いにやって、風通しよぐして、で少しずつ、てまだあればそこひっくり返すつがこうやって、せばこごから風が通るわけ。（ハの字のように）うん、だいたいそいうふに少しく乾けばね、そいうふになるたて、掘ったままだば、少しやわらかいがらこう、たんだ積んでいって、で、今度少し乾いがらこんだハの字にして、そうせば秋までに乾ぐわけ。でその乾いだのを、今度それはそこにその一冬ハアそうやっておいだり、まだ、（突然、感情を込めて）燃やしたんだよねえ！うん！乾いでくれば火つけで。せば、くすぶってくすぶって！ソドは乾いでるんだけど、ナガ湿ってるとごでね。ながなが燃えないわけ。せばそれをこだひっくりがえしひっくりがえしして。だんだんこうちっちゃぐなってくれば少しく空き地のどごさ持つてって、でこの、こだほら、盛りあげてれば自然にくすぶりながら燃えだったわけ。」「で、私のウチばかりでねえ、ほうぼでこう、各自やるがら、みんなあすこでシグボ燃してらどもってね、で、晩も、あんまりあの、消すとかなんとかしなかった。うん。煙って煙って、で、晩に来るときになればその、もっと濡れだの上さあげてくるわけ。そすれば、乾燥するでしょ。ある程度。で今度ほら、行って、朝次の日に行ったりして、こんど濡れでらそれをこう少しく、起ごせば今度オゴリがいっぱいあるわけ。でそのえ（上）さ乾いでらのあげてまだだがらずとみな火種消えでながったよ。うん。そいふにしてやったったの。」「で、それからあの、リヤカーつのもあるでしょ。リヤカーのはね、ホントに今言ったみたいに5～6枚、持つより楽だけでも、引っ張る人もねばねわけ。で今度潰れるでしょ。シグボだどごで。だから一輪車も、一輪車オラホのうちではながったし、リヤカーさ入れても、持つより2～3枚くらい多くて、でもリヤカーは持つより少しはよげい入れるどもって、そしてリヤカーでやったどぎもあつたけども、まあ、ほとんどね、モッコとがね、ムシロさ入れて2つ3つずづ入れで引っ張って歩いたりそういうふうにならされたのよ。」「で、もう学校がら来れば弁当、食べだから（食べてすぐに）、（シグボを）しょるに行がねばなんねえ、ちゃっこいどぎだばて2～3年だばやっただと思いますよ。（筆者注：θ氏は、この「2～3年のころ」について、別の発言では「今で言えば中学生の頃から」と言っているので、中学2年～3年、つまり国民学校高等科2年生ころから、の意である）いっぺん（シグボを）しょってきて、食べだの洗って、ばこんだご飯支度とか、まあおいしくなくてもね、ご飯とか、やって、掃除して、そしてウチの人来るの待ってたまに今しゃべたように焦げご飯にしてみだりね。そふにしてやってもまだ2～3年だどごでウチの人もね、忙しいどごでそれ作ねば食べられねがったどごで、あんまりおごるもしねえしね。こんだ焦がさねよにしろ、遊んでばりいれば焦げるんだって言われだりしてね。そうふにして、やりました。」「ウチでは普通に鍋で、それ（カギズギ）でやったり、ストーブあつたしよ。それで炊いだり。（マキストーブの上に鍋をのせて）そうそうそう。で、あの、こちの古しいカギとかは、その家庭にもよったと思います。ウチでは殆どストーブでばかり。ご飯炊ぐどぎはね。うん。そうふにやって、で、晩にご飯足りねどぎあれば、こんだこのカギのこれさちっちゃい鍋かげで、やって。そうそうそう。で、ちちえがらご飯炊がされで、遊びたいし、ご飯たがねばねし、ご飯鍋かげでその辺でみんな遊んでれば、朝ご飯が真っ黒になって（笑）。でもね、子どもだどごで、あまりウチの人どもね、大目に見だりして、だてそのどぎ今ど違って、米なもそんなに貴重でねがったどごでね、米ば米たてハアそつさやって、まあ食べだ。」「ちいちゃいちゃいちゃい、2年生が3年生からね、学校がら来ればハア靴置いで、とにかく米といだり、その辺掃き掃除、まあ、それこそ縞模様であれ掃除してね。そいふにして、でもう、おつゆもね、今晚これどこれどっておつゆ煮どげってばそれでやったりね。もう2～3年、みんな2～3年の頃から私みたいだ年頃の人で田んぼ持つて人。シグボ掘るのは、あの、掘るのは親どやるわけどもね、運ぶのは学校がら来れば、2枚が3枚ね、こんなの、2枚が3枚でも、あの、ムシロさ入れて引っ張って歩いてそごまでやって。やったり、で、今みたいに一輪車つてもね、きがながったの。潰れで。穴になってしまつて。

もう板でも敷けばいったって、子どもなんどぎだもの一輪車置いだの上で歩けないし、だがら、もう結構ね、で、まあ5～6、こんなぐらいの5～6枚入れで、重いんだ（感情をこめて）、とにかく。で5～6枚入れで、引っ張ってったり、相手があれば、それで入れで持ってたね。そふにやって、かせがせられだったの。」「（シグボについては）むがしやたのだどごでね、その家庭家庭で違うとは思うんだけど、でもまあシグボづのはそうふにみんなですりました。

用途 非常に手間暇をかけて成形し運搬し乾燥させたシグボであったが、θ氏の家では、屋内で燃やすことはなかったという。利用したのは主に屋外であり、田植えの際の採暖や、農作業時の調理に用いられた。前項でみたように、シグボのオゴリ（熾）が大量にできるので、それを寄せ集めて燃料とした。当時は仕事着といっても薄手のものしかないため、採暖には重宝したという。

また、11時ころになると誰かが先にあがって昼食の支度をはじめた。シグボのオゴリ（熾）の上に鉄輪を置いてナベを据え、持参した水とダシを注ぎ、野菜と味噌を加えて汁物を作ったり、塩マスや鰯を焼いたりして食べたという。寒いときの汁物は体が温まってとても美味しかったとθ氏は語る。そのような意味で、シグボは「マキのかわり」として非常に役に立ったという。炊飯にシグボを用いることはなかった。農作業時の飯も、自宅で炊いたものを現場へ持参した。θ氏が子どものころ、炊飯は囲炉のカギツギ（自在鉤）に吊した「ご飯ナベ」でおこなっていたが、その後はマキストーブを使用するようになったという。

「で、まあ、ホントになんつう乾けばね、軽一ぐなって燃えるわけ。木の根ばかりだがら。ツチもなくてね。木の根ばかりだがら。そういう風にこんだ乾けば、でもウチさ持ってきて燃やす人ってながったと思う。私のウチは。だって煙るんだものウチさ持ってくればへばこんだウチのイロリつ、ウチのながつのはこれぐらいでしょ。」「（家にシグボを）持ってくる人もあったがもしないけどね、木の根であれね、こう、シカグでしょ。へばまだこうまっすぐ割れるの。乾いでしまったどご木の根だし。でも、煙るんですよ。ウチで燃せば。うん。だがら大概、表で、で今ど違ってみな田んぼのほどご飯食べたりするわけね。そせばもう思いっきり、煙らがして、いっぱい煙出で。でちょうどご飯食べるどごでぐらいになれば今度なんつの、炭みたいに、オゴリがいっぱいできるわけ。でそれで今度あ鍋持ってっておつゆ煮だりなんかして、ちょっとせば、まあそんなにムガシのほんとサガナもないとぎだしね、ま、鰯とかそんなぐらいのもの、それでもまあ、いっぱいオゴリが出るがら、こっちで三脚みたいなやづき鍋かげで、おつゆ作るにほら、全部味噌持って、野菜持って、入れで、でそのオゴリで三脚こうやってね、おつゆ炊いでこごで、こんだその持ってたまあ、塩マスとかね、昔だもの、鰯とかそんなの焼いたり、して。やってもう、ホント火力は強がったの（感情を込めて強調）。木の根ばかりでも。そやって、やらされで。」「ウチさ持ってきて燃やすずのはあんまり…ウチではやらながった。他所の方はどうが知らね、火力は強かった（感情を込めて強調）。すんごくね、木の根ばかり、密集したのをこう、四角に採って乾燥させるとごでね。（炊飯は）出来たかもしれない。あの、こう、ゴトクみたいやづおっきいのさの、でも、ご飯は大概ウチで炊いで、弁当に入れて持っていたり、入れ物に入れて、人数あればね。ご飯そのまま移してそのまま持って行って。ご飯だけはウチで炊いで行っただと思います。他所のことはわがねけどね。おつゆとがね、ちょっとした魚はオコリで、煮だり焼いだり。うん。煮だり焼いだり。もちろん、5月のサガの寒いどぎなんかね。もうオコリいっぱいあるんだもの。それで暖採って、ご飯たべで。ご飯たぐのだけはウチではやらながった。おつゆ煮るのはね、出汁入れて水も持って行ってるわけ。でまあ、だいたい11時過ぎればね、誰かがあがって鍋さ水入れで、持ってきた豆腐どか野菜を入れで、オゴリいっぱい下さ置くわけ。そせば煮だってきて、それさこんだまだ味噌入れでね。それでも山のご飯でなもんなんだもの。結構ね、熱いおつゆ食べればおいしかったよ。寒いしね。今ど違ってみなに着るのもね、あの、薄くてあったがいのねんだもの。あづいの着れば腰いだがべし疲れるべしねえでも雨降れば濡れるしね。で、結構、シグボ役に立った。うん、その時はね。それこそマキのかわりになったどごで。で、もう使い余したのこっちさ持ってきてこの辺で煙って煙って煙って少しくオゴリになれば、一カ所さあづめでこやればね、割とね、素直に燃えだり。でも炭とかそういうのにはなんながった木の根だどごで。いじればあ、こう、崩れでね。」

操作 シグボに火をつけ、夜通し燃やし、翌朝オゴリ（熾）になったものの上に別のシグボを上げて乾燥させた。上げたシグボが次には熾になるという繰り返しにより、火種が絶えることはなかった。シグボを処分すると同時に、火を持続させるための工夫であった。「うん。煙って煙って、で、晩に来るときになればその、もっと濡れだの上さあげでくるわけ。そすれば、乾燥するでしょ。ある程度。で今度ほら、行って、朝次の日に行ったりして、こんど濡れでらそれをこう少しく、起ごせば今度オゴリがいっぱいあるわけ。でそのえ（上）さ乾いでらのあげでまだがらずとみな火種消えでながったよ。うん。そいふにしてやったったの。」

副産物 「運搬・乾燥・保管」の項で述べたように、シグボの乾燥を促進するために、火をつけたシグボの上に生乾きのシグボを乗せて燃やしたため、ひどく煙が出た。夜通し、他の家でも同様のことをおこなうので、あちこちから煙があがった。「どうしてこんなに煙があるのか」と思うほどの煙たさであったという。「もう火つけでおげばね、

こっから、この田んぼいちまい、火つければね、で、こうあつこつさほれ、へだに置けばみんな煙るわけ。すごい煙だったの。こっからこごまでわむつけ。なんであたに煙あるべど思う。で、私のウチばかりでねえ、ほうぼでこう、各自やるがら、みんなあすこでシグボ燃してらどもってね、で、晩も、あんまりあの、消すとかなんとかしなかった。うん。煙って煙って」

【その他】 θ氏は学校から帰るとすぐにシグボの採掘や運搬を手伝い、親にかわって家事をした。周囲もみなそうだったので、それが当たり前だと思っていた。遊びたい盛りだったので、家事をしながら土団子をつくって友達と遊んだという。「昔の人はみなそれあだりまえだどもってやったのだけでも、今はねえ、みんな塾だなんだって、あのあだり塾だなんてねんだもの。とにかく学校がら来れば田ぼ持った人ハア親のてづだいどが、そでねばその辺で遊んで2〜3年だもの一緒に遊びたいよね。へば鍋かげでそどさ行って遊んで、でこだ遊ぶののもないし。こだツヂあづめで、水汲んできて、入れで、せばツヂかだまれば、こうまるーぐ茶碗カダヂなるわけ。それがもうね、マルぐするためにツヂこう、寄せで、こんだこごこうやってさ、こやして、こうやれば、ちょうどう丸くなるわけね。で水入れで、少し置けば堅くなるわけ。そいんたどごでシラミも虫もたがるはずだよ。でも今のほどにね、いじめとか、そういうのものがつたし、まあみんなそれなりに、そのどぎ過ごしてきて、だがらシラミも虫も何もたがっても、今ほどうイジメとか何もなくてね。まあ育って来たんですよ。こごに（笑）。」「知らないくて、もっともっと経験者だ人もいるし、お話も上手な人もいるがもしれないけども、私はここで、青森県の上北、ムガシ浦野館ったらね、浦野館で育った人だどごでなんも知らないの。この年になって、恥ずかしながら、飛行機も新幹線も乗ったことないの。とにかくうちにばっかして。結婚してから、まあ、そういうどごさ行けば行ったがもしれないけども、もうあまりウヂがらは出ないもの。だがら青森県がら出だごどないの（笑）。岩手まではね、行ったこともあるけども、あどはもう。それ以上どごさも。今の人にして、飛行機さ乗ったどごねどが、新幹線さ乗ったどごねどがってめずらしべけども。そのめずらし人この一人なるんだすびょん。でもまそれで過ごしてくればね、なんともなくて、この年になりましたので。」

（2016年8月27日取材）

3. 整理と考察

今回の調査地域では、シギボ（泥炭）のほかにアンタン（暗炭、亜炭）が自家用として利用されていたことがわかった。3-1「シギボ」、3-2「アンタン」の順にまとめる。

3-1 シギボ

(1) 呼称

植物遺体が未分解のまま堆積したいわゆる「泥炭」のことを、津軽地方や下北地方の一部ではサルケ（サラケ）と呼ぶ。これに相当するものを、上北地方では「シギボ（シグボ、シゴボ、シクボ、シキボ）」と呼ぶ。

・**地域的な差異** 対象地域全体では、「シギボ」と発音するものが、呼称についての回答を得た52名中38名あった。「シギボ」という発音が優勢である。次に多かったのが「シグボ」と発音するもので、52名中18名。その他、「シクボ」「シゴボ」と発音するものが各1名あった（※1名が複数の呼び方をするという場合は、それぞれカウント）。地域的な傾向はそれほどみられなかったが、榎林地区では、調査対象となったすべての人が「シグボ」と発音していた。

・**世代的な差異** 沼崎低地に接する上野地区の台地部では、泥炭を利用した経験を持つ人11名のうち9名は「シギボ」と発音し、利用の経験のない人6名中5名は「シグボ」と発音するという特徴がみられた。利用の経験の有無は生年の早晚と関係しているとすれば、世代的な違いに由来するものだろうか。

サンプル数が少ないため、あくまで今回の聞き取りの結果の範囲での話だが、発音に地域的、時代的なある種の傾向があることが考えられる。今回の調査に限っていえば、全体として「シギボ」という呼称が多数派であったので、便宜上、以下の地の文では「シギボ」ということばを用いることにしたい。

(2) 年代・普及

戦前には使用されていた（上野[低地]②⑤）、戦前まで（上野[低地]①⑨）、戦前から戦中（上野[低地]⑪）、昭和17-18年頃には使用されていた（上野[台地]⑩）、昭和20年前後まで（②⑧上野[台地]⑥、上野[低地]②③）、昭和23年には使っていた（上野[低地]②）、昭和20年代前半ころまで（上野[台地]①、上野[低地]②⑥）、昭和20年代後半まで（上野[台地]④）、昭和20年代まで（上野[台地]③、上野[低地]⑬、榎林⑭）、昭和30年頃まで（上野[台地]⑨）、昭和31年よりも前あたりまで（上野[低地]⑥）、昭和34-5年頃まで（上野[台地]⑤）、昭和47年ころまで（上野[低地]③）という回答を得た。戦前戦中に使われなくなったという人もいれば、昭和40年代まで使用していたという人もあった。

榎林地区では、シギボは認識されていたが、榎林④の一事例を除き、利用したという証言は得られなかった。ただし、昭和10年生まれ男性は村の年配の人たちから聞いた話として「シギボを引き揚げて、昔は火を燃やして、焚き付けとかにしたらしい。自分たちの頃はもうなかった」と語る（榎林⑥）。古い時代には利用されていたのかもしれない。そのいっぽうで、アンタンの利用については複数の証言がみられた。榎林でシギボがあまり使用されなかったことと、アンタンという別の燃料があったことは、関係があるのではないだろうか。（※p. 156「アンタン」の項参照）

(3)性質や分布についての認識

A.定義 シギボとは何かと尋ねると、人々は次のように説明した。シギボとはどのようなものであるかという認識を示すものである。

・根である

最も多く聞かれたのが、「草の根である」（上野[台地]①②④、上野[低地]⑬⑭⑮⑯）、「木の根というか草の根が密集しているもの」（上野[低地]⑩）「土の含まれない木の根ばかりのもの」（同前）など、「根」であるとする説明である。「ネッコみたいなもの」（上野[台地]⑫）という表現もあった。植物を限定して「スゴロ（かや）の根である」（上野[台地]③）、「ススキの根（が腐ったもの）」（上野[台地]⑭）、「ヨーシの根（が腐ったもの）」（上野[低地]⑪）とするものもあった。泥炭を「根」と捉える解釈は、秋田県横手市における「ネッコ」（泥炭）という方言を想起させる。

・草や藻である

「根」であるという解釈に対し、「草」であるという説明も聞かれた。「草のようなもの」（上野[台地]⑮、榎林⑰）、「草の乾燥したようなもの」（上野[低地]⑮）、「草が積み重なったもの」（上野[低地]⑰）、「田の下から出てくる草」（上野[低地]⑱）、「草の枯れたようなムガムガしたもの」（榎林⑱）といった説明である。また、「湖のほとりに寄せられて溜まる海藻のようなもの」（舟ヶ沢⑳）という説明も聞かれた。『広辞苑』によれば「すくも」とはすなわち「藻屑」であるというから⁴²⁾、この場合はまさにそのような意味で用いられている。

・腐ったものである

植物が腐って堆積したものであるという説明も多い。「昔の植物が腐って堆積したもの」（上野[低地]⑱）、「草が腐って重なったもの」（上野[低地]⑲）、「草の根の腐ったムススズ重なったもの」（狐久保㉑）、「草の根のようなワラが腐って乾燥したようなもの」（田ノ沢㉒）、「草の腐ったもの」（浜台㉓）といった説明である。植物を限定して、「ススキの根が腐り、長年の間に堆積したもの。木が腐ったような、草の根のようなもの」（上野[台地]⑭）、「ヨーシの根が腐ったもの」（上野[低地]⑪）とするものもあった。また、「土の腐ったもの」（榎林⑭）という説明も聞かれた。

・腐らずに堆積したもの

植物が腐らずに堆積したものであるという説明も聞かれた。この解釈は、冷涼な気候のために植物の分解が進まない状態を経験的に捉えているものと思われる。「草木が腐らずに堆積したもの」（上野[台地]⑤）、「土ではなく、柔らかくて、もとは草であったもの」（上野[台地]⑥）。

・その他

「ソータンである」（上野[台地]⑨）と説明する人もいた。この地域でこのような説明をおこなう人は稀であった。「ソータン」（草炭）ということばは、泥炭のうち特に草本類に由来するものを指す用語として用いられることがある。このことばを生活用語として用いる地域としては、静岡県藤枝市が挙げられる。藤枝では「ソブ」と「ソータン」を、泥炭に対する人的関与の有無を区別する用語として用いているようである⁴³⁾。今回の調査では、そのような用いられ方はされておらず、また周辺でのこの用語の使用も一般的でないことから、特殊な例であると考えられる。また、「シギボの『ボ』は土のことであり、シグド（土）が、訛ったものである」（上野[台地]⑤）という説明も聞かれた。話者独自の解釈だろう。

B.分布

おおむね、上北町全域に数メートルの厚さで分布していると認識されている。上北町周辺は「地盤が軟弱であるが、それが免震につながっている」（上野[台地]⑧）と考えている人もいた。また、昭和9年生まれ女性、自らの出身地である境ノ沢（上北町大浦境ノ沢）や隣の才市田（上北町大浦才市田）の田にはシギボがなかったが、隣接する上野（上北町上野）集落の人々が所有する田にはあったと語る（上野[台地]⑨）。境ノ沢や才市田ではシギボを燃やしたという話は聞かなかった（大浦⑭、上野[台地]⑨）。上野[台地]や上北町中心部に比べれば燃料の入手が比較的容易であったことから、別の場所から採取したり譲渡してもらったりするほどの必要性がなかったものと思われる。逆

に、燃料の欠乏の度合いが高ければ、津軽地方でみられるように他家の所有地や村の共有地に赴いて採掘したり、譲渡されたり購入したりする場合があったと考えられるが、上北地方についてはそこまで切迫した状況ではなかったものと考えられる。状況が切迫していなければ、つまり「あるから使う」程度であれば、シギボの有無（分布）と利用の有無には関連性がある。

・地域的ひろがり

上北町全域にシギボが広がっていると認識されている。「集落のはずれから境の沢のあたりまでの通称『コマヤチ』（馬の草を刈る共有地）一帯」（上野[台地]①）、「このあたり一帯」（上野[台地]②）、「上北町周辺はシグボの地域」（上野[台地]⑨）「上野の下のほうに広がる湿地帯」（上野[台地]⑨）、「上北町中心街や上野にある。新山にはない」（大浦⑩）、「上北町の平野部の湿地」（上野[低地]⑬）、「このあたりの低地一帯。甲地方の高い場所にはない。」（上野[低地]⑳）、「周囲一帯」（上野[低地]㉑）「上北全体がシギボ田」（榎林㉒）、「湿地であればどこにでも」（榎林㉓）。

シギボの分布する代表的な場所として「サンバヤヂ」（三番谷地）を挙げる人が多かった（上野[台地]⑬、上野[低地]㉔㉕㉖㉗）。これは、サンバヤヂに特に濃厚にシギボが分布しているという意味ではなく、サンバヤヂに住む人々がさかんにシギボを利用していたという見聞にもとづく説明である。「シグボといえばサンバヤヂ」（上野[台地]⑬）、「自宅を含め、周辺一帯に分布。北谷地、南谷地の地名どおり、湿地が広がっており、とくにサンバヤヂが本場」（上野[低地]㉔）、「居住地一帯に分布。周囲の田はみなシギボ田である。シギボはサンバヤヂが一番」（上野[低地]㉕）、「このあたりには分布しておらず、サンバヤヂやシンチョウ方面にある」（上野[低地]㉖）、「道の駅小川原湖周辺、サンバヤヂなどに特に分布している」（上野[低地]㉗）。

・上下のひろがり

地域住民からは、表土の下1.5～3メートルほどの深さに分布しており、町の東側、すなわち沼（小川原湖）に向かってシグボの層がより深くなっているという認識が示された。具体的には、「厚さは2メートルほど」（上野[台地]①）、「旭町方面に行くほど深く、6尺程度の深さ」（上野[台地]③）、「表面から3メートルほど下に分布している」（上野[台地]⑤）、「表土（黒土）の下にある」（上野[台地]⑥）、「クサヤヂの表層の黒土の下に分布」（上野[低地]⑧）、「上北南地区では1.5メートルほど下がシギボの層」（上野[低地]㉘）、「田の下にある」（上野[低地]㉙）、「宅地の隣に当時の田の一部が残っているが、1メートルほど低い。更に1メートル下に青黒い粘土質の層がある」（上野[低地]㉚）、「昔はたくさんあって、田の下にたまっていた」（浜台㉛）などの証言である。

C,質的差異、質的評価 津軽地方や下北地方で示されたような、泥炭の質に対する繊細な感覚はあまり感じられなかった。燃料に対する深刻さの度合いが異なるためではないか。「柔らかいシギボが良いシギボである」（上野[台地]②）、「深くなればなるほどきれいな色をしている」（上野[低地]⑤）、「柔らかいものと堅いものがあるが、燃料としては柔らかいものがよい」（榎林㉒）などの証言からは、「シギボの層の深浅と質の差異」、そして「質の差異と燃料としての適否」を関連づける認識があったことが見て取れるが、津軽地方のように「田ザラケ」「ボヤリ」「ボヤケサルケ」「ネンドサルケ」などと複数の呼称によって質的差異を認識する（表現する）姿勢⁴⁴⁾は見られなかった。

(4)入手 シグボを利用すると答えた18名（上野[台地]①②③④⑤⑥⑧⑨⑩, 上野[低地]⑬⑭⑮⑯⑰⑱㉒, 榎林㉒）は自ら採取（採掘）する、または拾って来ると答えた。上野の人が大浦に近い田から自家用に採掘している光景を見たという人もいる（上野[台地]㉑）。購入や譲渡についての証言はなかった。

(5)採掘

A,目的

・自家用燃料として用いるため

「マキのかわりの燃料として」（上野[台地]①②⑥⑧⑨⑯⑱㉒）という回答が多かった。なぜマキのかわりが必要かということについては、「周辺に木が乏しかったから」（上野[低地]㉔㉕）、「燃やすものがないので」（上野[台地]⑧）、「山がないから」（上野[台地]⑨）と述べる人がみられた。このこととつながるが、「燃料と経費の節約」（上野[台地]⑧⑨）という理由も聞かれた。経費の節約については、台地上の集落に対し低地には「分家が多く裕福ではないため」（上野[台地]⑨）と考えている人もいた。

・土地改良にともなう副産物である

開田、田地の改良

上記のように上野の台地部では、燃料の乏しさが強調されたのに対し、上野の低地部では開田に力点を置く説明が複数聞かれた。「開田のために上層だけ採取した」（上野[台地]①）、「開田のため」（上野[低地]㉔㉕）、「稲が育たないので」（上野[低地]㉖）、「シギボをなくすため」（榎林㉒）などの証言である。じつは、上野の低地部（とりわけ

サンバヤチ周辺)のほうで燃料の入手は難しく、採掘したシギボを燃料としてより重視していたのであるが、ヤチ(湿地)を拓く作業＝開田の記憶が、より新しく印象深いため、燃料の乏しさよりも開田に主眼が置かれたと考えられる。

また、榎林出身の昭和14年生まれ的女性(榎林⑭)は、開田にともなってシギボを採取したが「とっておいてもしょうがないでしょ」と語った。この女性は、マキとシギボを併せて燃料として用いており、シギボに燃料としての価値を認めていないわけではなかった。にもかかわらず「とっておいても仕方ない」というのは、必要以上にシギボが豊富であり、重要性が低かったということの意味しているのだろうか。

水路の整備

いっぽう、上野地区の人々も、低地部に田を所有していたが(上野字手長、上ミ田など)「第一の目的は堰づくり」(上野[台地]④)、第一目的は「へぎとオドシを作ること」(上野[台地]⑤)というように、堰の改良にともなう副産物として語る人がいた。

開田にしろ水路の整備にしろ、別の目的に付随する副産物としてシギボを位置づけるものである。

B.時期

・田植え前

田植え前におこなうとの証言は、主に低地部で聞かれた(上野[台地]⑥、上野[低地]⑱⑲⑳㉑㉒)。上野の事例を除けば、いずれも、採掘場所として挙げられたのはサンバヤチという湿地である。サンバヤチ周辺に住む人のなかには「田では採らなかった」とはっきりと証言する人もいる(上野[低地]㉑)。湿地から採る場合、田から採取するときのような作業上の時期的・場所的配慮は不要だが、田植えよりも前におこなったのは、おそらく農繁期を避けることと、気候のよい季節を利用し、冬に向けて十分な時間をかけて乾燥させ、運搬の便をはかることを意図したものと考えられる。上野の昭和4年生まれの男性(上野[台地]⑥)も、田でそのまま乾燥させたい。軽くなるので運搬に都合がよいとのことであった。

・収穫後

稲刈り後におこなうとの証言は、主に上野の台地部で聞かれた(上野[台地]③⑤)。更に遅く、11月から3月にかけての冬場に採掘したという人もいる(上野[台地]⑨)。上野地区での採取先は田(上野[台地]③⑨)や堰(上野[台地]⑤)である。だから、農作業が一段落したのち、田や堰から掘り出した。上野は田地の改良にともなう副次的産物としてシギボを利用した地域である。この作業との関連のなかで、稲刈り後や冬場という時期設定がおこなわれたものと思われる。

・田植え前と収穫後

上北町の昭和17年生まれの男性(上野[低地]㉒)は、春先にも降雪前にも採掘をおこなうとのことであるが、春先におこなう際には「開田作業に邪魔にならないところに山積みにして乾燥させる」配慮をした。同じく上北町の昭和7年生まれ的女性(上野[低地]㉑)は、一年のうち「田んぼの暇なとき」「米をやらないとき」に採取したという。稲作に配慮した時期設定である。

・通年

通年採掘するという回答もあった(上野[低地]㉑㉒)。両者とも採掘場所としては「サンバヤチ」のような特定の場所ではなく「上北町駅周辺の平原」(上野[低地]㉑)、「ヤチ」(上野[低地]㉒)のように、漠然と湿原を指している。そして、前者(上野[低地]㉑)は「2～3年後に使用する1年分の量」、後者(上野[低地]㉒)は「それほど多くない」と答えている。つまり、1冬分としてそれなりの量を準備する必要から通年採掘したという解釈と、それほど量を採らないから通年で好きな時期に採掘したという解釈が成り立ち、通年で採取することについての共通の志向を見いだすことはできなかった。

C.場所

田や土地から採取する場合(上野[台地]③⑤⑥⑨⑩、上野[低地]⑥、榎林⑭)もあれば、共有地である湿原(上野[台地]①②上野[低地]⑱⑲⑳㉑㉒㉓)から採取する場合があった。上野の台地部では田から採取する場合が多く、低地部では湿地から採取することが多かったことがわかる。採取場所の通称として特に「コマヤチ」(上野[台地]①)、「カヤヤチ」(上野[台地]④)、「サンバヤチ」(上野[低地]㉑)という呼称が聞かれた。

また、他人の田から持ち帰る場合もあったようだ。「春などに他の人が重ねているのを持ってきたりしたが、誰も騒ぎもしない。みんなのモノというか、あまりそういうのをうるさく言わないと思う、昔は。どこから持ってきても良かった」(上野[低地]㉑)という。共有の財産であるという感覚があった。

D.主体

主としてシギボの採掘は男性の役割であると考えられる傾向があり、個別の事情によっては女性や子どもの参加もみられたということが、以下の証言から読み取れる。

・男性がおこなった

シギボの採掘は男性の役割であったという証言も多い。「重労働だから男性がおこなった」（上野[台地]④）、「採掘はもちろん男性である」（上野[低地]⑬）、「採掘は主として男性だったが、運搬は女性や子どもも手伝った」（上野[低地]⑭）、「家の旦那の父親が採掘した」（上野[低地]⑮）、「私たち女性はシギボに関しては全くやらなかった。男性が採掘した。女性は山から柴や葉を刈り取って運んだ」（榎林⑭）。

・男性も女性もおこなった

「男の人も女の人も採掘した」（上野[台地]⑩、女性）、「その家の事情によっては女性を含め一家で手伝う」（上野[低地]⑮、男性）、「嫁にきたころは私もやった」（上野[低地]⑯、女性）、「（今でいう）中学生のころ（国民学校高等科のころ）から家族総出でおこなった」（上野[低地]⑯、女性）という証言も聞かれた。

・採掘した経験はない

採掘の経験を持たない人も多くみられた。「まだ子どもだから手伝うことはなかった」（上野[台地]②）、「手伝ったことはないが、見ていた」（上野[台地]③）、「5～6歳であったので、自分では手伝わなかった」（上野[低地]⑬）、「自分はまだ幼かったので手伝うことはなかった」（上野[台地]⑩）、「自分は幼いので手伝わなかった」（上野[低地]⑳）などの証言である。この地域では、比較的早くシギボの利用がおこなわれなくなったためだろうか。筆者が近年、津軽地方や下北地方を取材した時に比べて、このような証言が目立った。

E.方法

・表土除去

シギボの層を露出させるためには、まず表土を除去した。その用具としてモッタが用いられた。「表土を除いて、その下のシギボを切り取った」（上野[台地]①）、「田やヤチをモッタで起こすとシギボがあった」（上野[台地]⑩）、「表土をモッタで取り除き、シギボの層を露出させた」（上野[低地]⑬）、「一坪くらいを範囲の目安として黒土を仮寄せした」（上野[低地]⑯）という証言があった。仮寄せした黒土は、当然のことだが「もったいないから」シギボの採取ののちに、戻す作業をおこなった。その一坪の範囲が終わるとまた別の一坪、といったように、田一枚につき一年を目安として、作業をおこなったという。その年にシギボを採る田が大きければ、春と秋の二度にわけて採取することもあった（同）。

・タヂ切りと掘り上げ

続いて、主にタヂを用いてシギボを適当なサイズに切り取り、モッタや二本鍬、三本鍬、四本鍬、カマ、スコップなどで掘り上げた。四本鍬は重たいので力のある人でなければ使いこなせなかったという（上野[低地]⑳）。また、手で起こしたという人もある（上野[台地]⑥）。

今回聞き取りをおこなった地域に特徴的なことは、スコップの使用（上野[台地]③④⑤、上野[低地]⑬⑭⑯、榎林⑭）である。津軽地方では垂直に切り込むための道具として、テスキ、テズキ、テンツキ（風呂鋤）やカナベラ（金鋤の一種）が用いられていたが、上北地方ではかわりにスコップが用いられている。上北地方では踏み鋤を用いることが多かったようだが、シギボの切り出し（垂直、直角に切り取る作業）には踏み鋤は適さなかったから別の道具（スコップ）を新たに購入する必要があるのだろうか。スコップや鍬で切り込みを入れて大きな塊で掘り上げる（上野[低地]⑬）という方法は、浅く広く掘り採るという考えにもとづく道具の選択である。この地域（上北一低地部）では、テスキを用いる津軽地方のように、深く掘ることへの執着が見られない。現在のように田野が広がったのが比較的あたらしい時代であり、当時はシギボを採取できる土地がある意味「無限に」広がっていたからではないだろうか。

以下は、証言の要約である。「シギボをタヂで豆腐のように切り取った」（上野[台地]①）、「タヂで根を切り、先端を研いで鋭くしたスコップで掘り採った。スコップに限らず、さまざまな道具を用いた」（上野[台地]③）、「スコップやタヂを使って掘り上げる」（上野[台地]④）、「スコップの刃の長さで掘り上げる」（上野[台地]⑤）、「タヂで切れ目を入れて手で起こす」（上野[台地]⑥）、「タヂを使ったと思う」（上野[台地]⑨）、「タヂで切れ目を入れたものをモッタで30×40cm程度に掘り採る」（上野[低地]⑬）、「スコップや鍬を入れて1m四方の大きさに切り出した」（上野[低地]⑬）、「タヂで切れ目を入れ、三本鍬で引っ張った（掘り起こした）。二本、四本鍬も使用」（上野[低地]⑳）、「タヂ、カマ、スコップなどで掘った。特にスコップが使いやすい。柔らかいので手で割ることも可能。それほど深くは掘らない」（上野[低地]㉑）、「タヂで掘った」（上野[低地]㉑）、「三本に分かれた道具」（上野[低地]㉑）、「タヂで切れ目を入れ、モッタで起こした」（上野[低地]㉑）、「タヂで切り込みを入れ、角スコップで切り取る」（上野[低地]㉑）、「タヂで四角に切り、スコップで掘り上げた」（榎林⑭）。

・サイズ

「レンガ大」（上野〔台地〕①、同〔低地〕②）、「60～70cm 四方、厚さ10～15cm」（上野〔台地〕③）、「薄く掘る人もあれば大きな塊で掘る人もあり人それぞれ」（上野〔台地〕④）、「20～30cm 程度」（上野〔台地〕⑤）、「20cm×30cm」（上野〔台地〕⑥）、「ブロック塀のブロック 1 個分」（上野〔台地〕⑨）、「30×40cm の直方体」（上野〔低地〕⑬）、「1メートル四方」（上野〔低地〕⑰）、「W50cm×D30cm×H20cm 程度の四角形」（上野〔低地〕⑳）、「

	切り取る大きさ	地域、事例番号
小 ↓ 大	レンガ大	上野〔台〕①、〔低〕②
	ブロック塀の1ブロック大	上野〔台〕⑨
	20-30cm×20-30cm	上野〔台〕⑤⑥
	30×15×5cm	上野〔低〕⑬
	1尺×1尺×10cm	上野〔低〕⑭
	30-40cm×30-40cm×30-40cm	上野〔低〕⑱
	50×30cm	上野〔低〕⑲
	60-70cm×60-70cm×10-15cm	上野〔台〕③
	100cm×100cm	上野〔低〕⑰

切り取るサイズの一例

「一律でない」（上野〔低地〕④）、「W30cm×D15cm×H5cm」（上野〔低地〕⑬）、「一尺四方×10cm」（上野〔低地〕⑭）という証言があった。これらの証言から、小さいサイズでは「レンガ大」、大きなものでは60～70cm あるいは1メートル程度（縦横）で掘り上げることがあったようだ。上野地区の昭和6年生まれの男性（上野〔台地〕①）は、レンガ大にする理由を「早く乾燥させるため」とであると説明する。また、同地区の昭和16年生まれの男性（上野〔台地〕⑤）は、「スコップの長さ（に相当する）」と述べ、使用する道具と掘り採るサイズとの関係に言及する。同じく昭和14年生まれの男性（上野〔台地〕④）は第一の目的は堰掘りであり、シグボは副次的産物であるとしているが、そのためサイズはまちまちであり、「堰の幅や深さと関係する」としている。

・裁断

「掘り出した塊はタザで10cm 程度にスライスする」（上野〔低地〕⑬）、「モッタで起こしたものを、レンガ状にタザで切る」（上野〔低地〕⑱）という証言があった。大きく掘り出してから小さく裁断することで、掘り出す際の省力化につながる。また「柔らかいので手で割ることも可能」（上野〔低地〕⑲）であったという。

・深さ

具体的には「30×40cm の 2 段分」（上野〔低地〕⑬）という証言があるが、その他は「それほど深くは掘らない」（上野〔低地〕⑲）という証言のように、「切れ目を入れて三本鍬で引っ張り出す」（上野〔低地〕⑲）程度の深さであったようだ。60～70cm 四方に切り取る、という上野地区の昭和8年生まれの男性（上野〔台地〕③）の場合、厚さはせいぜい10～15cm であり、面積を広く採るかわりに浅く掘ったようである。この地域ではヤヅ（湿地）から採取する場合、深く掘ることも可能であったはずだが、せいぜい2段分であった。これは津軽地方で溜池などから5段分を採ることと比較すれば少ない。燃料に対する渴望の度合いが異なる、あるいは採取できる湿地の範囲が広大であった、等の理由が考えられる。

(6)乾燥

・場所

採取したその場で乾燥させる場合（上野〔台地〕①③⑤⑥⑩⑮、上野〔低地〕⑬⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㋀㋁㋂㋃㋄㋅㋆㋇㋈㋉㋊㋋㋌㋍㋎㋏㋐㋑㋒㋓㋔㋕㋖㋗㋘㋙㋚㋛㋜㋝㋞㋟㋠㋡㋢㋣㋤㋥㋦㋧㋨㋩㋪㋫㋬㋭㋮㋯㋰㋱㋲㋳㋴㋵㋶㋷㋸㋹㋺㋻㋼㋽㋾㋿㌀㌁㌂㌃㌄㌅㌆㌇㌈㌉㌊㌋㌌㌍㌎㌏㌐㌑㌒㌓㌔㌕㌖㌗㌘㌙㌚㌛㌜㌝㌞㌟㌠㌡㌢㌣㌤㌥㌦㌧㌨㌩㌪㌫㌬㌭㌮㌯㌰㌱㌲㌳㌴㌵㌶㌷㌸㌹㌺㌻㌼㌽㌾㌿㍀㍁㍂㍃㍄㍅㍆㍇㍈㍉㍊㍋㍌㍍㍎㍏㍐㍑㍒㍓㍔㍕㍖㍗㍘㍙㍚㍛㍜㍝㍞㍟㍠㍡㍢㍣㍤㍥㍦㍧㍨㍩㍪㍫㍬㍭㍮㍯㍰㍱㍲㍳㍴㍵㍶㍷㍸㍹㍺㍻㍼㍽㍾㍿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

・積み方と工程

仮寄せして放置後ある程度水分が抜けてから間隔をあけてレンガ積みするという方法や、互い違いに水平に重ねてある程度乾燥させてから八の字に立てかけて乾燥させる方法、「ドンコロ」を渡して立てかけて乾燥させる方法、または単に山積みする方法、などがあった。また、仮寄せして水分を抜いた（一次乾燥）のち、小さいサイズに切った場所を移して家の軒下に移動させたりして、更に乾燥を促進させる、という場所を移動しての二段階乾燥がおこなわれるケースもあったことが、次の証言から見て取れる。「その場に互い違いに積み重ねて乾燥させる」（上野〔台地〕①）、「仮に寄せておき、ある程度乾燥させたのちに10cm 程度にスライスして一次乾燥させ、次に高さ1メートル、長さ2メートルにレンガ積みして風通しをよくし、二次乾燥させる」（上野〔低地〕⑬）、「放置したのち、農作業の暇をみながらレンガ大に切り、積み重ねて乾燥させる」（上野〔低地〕⑱）、「日が良く当たり、かつ風通しのよい場所にドンコロを渡して斜めに立てかけて乾燥させる」（上野〔低地〕⑲）、「重ねかたの法則はなく、開田作業に邪魔にならない場所に山積みにして乾燥させた」（上野〔低地〕⑲）、「掘ったままだと柔らかいので互い違いに積んでいき、少し

乾いてから今度は八の字にした」（上野〔低地〕⑩）などの証言である。これらの証言は、個人によってさまざまな方法が採られていたことを示している。

注目したいのは「ドンコロ」に掛けて乾燥したという証言（上野〔低地〕⑩）である。シグボは下から水分が抜けていくので、地面に直置きすると水分が十分に抜けずよくないという。ドンコロを渡してシグボを斜めに立てかけることによって、水がよく切れて乾燥する。並べる場所は自宅の庭であり、日あたりと風通しのよいところを選ぶという。また、はじめは水平に積んで水切りをおこない、のちに八の字形立てかけて乾燥させるという方法（上野〔低地〕⑩）にも注目したい。これは津軽地方でおこなわれている「スモコトラヘル」かたちの乾燥方法に似ている。掘り採った当初のシグボは柔らかいので、まず互い違いに水平に積み重ねてある程度乾燥させ、少し乾いたところに八の字型に立てかけ、秋まで乾かしたという。その間も繰り返し反転させ、それなりに乾燥して小さくなったところに再び別の場所に積み重ねておくという入念さである。これら上野〔低地〕⑩、同⑩の例は、田のクレなどに直置きして十分に水分が抜けきらない状態で運び始めるという事例（上野〔台地〕④）などに比べると、より繊細な工夫と丁寧な心遣いが感じられる。こういった違いは、シグボを燃料としてどの程度重要視していたか、貴重なものとして捉えていたか、という時代や地域、あるいは家庭や個人の意識の差によるものではないかと考えられる。ただし、上野〔低地〕⑩の事例では、屋外での調理や採暖にも使用したが、シグボを処理することのほうに力点がおかれていたらしく、丁寧に扱うことの意味は、燃料として大切にしていたというよりは、燃焼による処理がよりスムーズにおこなわれることを意図していたようである。ただし処理されたシグボ（灰）がどのように活用されたのかは不明であった。五戸地方では、土地を一区画ごとに掘り返してシグボを焼き、その灰を敷くことで水持ちをよくする開田方法があるというが⁴⁵⁾、今回の聞き取りではそのような話も聞かなかった。

・時間

人為的操作を加えての短期集中型

「乾燥期間は約一ヶ月」という短期間で乾燥をおこなった上野の昭和2年生まれの男性（上野〔低地〕⑬）の場合、10cm程度の小さなブロックとしてレンガ積みするなどの人為的な操作を加えることで乾燥時間の短縮を可能にした。同様に、上野地区では「ドンコロ」に立てかけたり、八の字に組み合わせたりすることで風通しをよくし、更に反転を繰り返して乾燥時間の短縮を図ったという事例がある（前項参照、上野〔低地〕⑩⑥）。

放置による長期自然乾燥型

対して「収穫後に採取し、春までその場に放置。自然乾燥したところを見計らって使用する」（上野〔台地〕⑤）、「その場に並べて秋ころまでに乾燥させた」（榎林⑭）など、長期間放置することで自然乾燥を待つ例もある。

上野の低地部では人為的な操作がおこなわれ、上野の台地部や榎林では自然に任せて放置するという、両者の態度の違いは、シグボに対する必要性（渴望）の濃淡が反映されていると捉えることも可能ではないだろうか。

(7)運搬

・タイミング

乾燥後に運搬

乾燥後に運搬するという事例が多い（上野〔台地〕①③④⑤⑥、上野〔低地〕⑬⑭⑥、榎林⑭）。軽量化のメリットが考えられる。筆者の調査では、下北地方でもこの方式が主流であった。

運搬後に乾燥

家に運搬してから乾燥させるという事例も少ないながらみられる。その場で乾燥させたのちに自宅で二次乾燥をおこなう（上野〔台地〕④）、自宅でドンコロにかけて乾燥した（上野〔低地〕⑩）、自宅の軒下で更に乾燥させた（上野〔低地〕⑭）などの証言がある。

上野〔低地〕⑩の事例以外は、自宅での乾燥は二次的なものであり、まずは採取した場で乾燥させることが基本であったようだ。

・方法

畜力による方法

「束ねて馬車で運搬した。運搬は男性がおこなった」（上野〔台地〕①）、「縄で馬車に縛り付け、降雪前に家まで馬に曳かせて運んだ」（上野〔台地〕③）、「軽くなってから麻袋に入れて牛馬の背に積んで家まで運んだ」（上野〔台地〕⑥）、「（乾燥前に）バソリで家まで運んだ」（上野〔低地〕⑩）、「（乾燥後に）馬車で家に運搬した」（榎林⑭）などのように、家畜を使用して運搬する例が多くみられた。とりわけ馬車の使用が目立つ。

人力による方法

いっぽう、「ショイカゴや苗を入れて背負う木の箱などを利用して家へ運んだ。その際、ミノを着て背中が濡れないようにした」（上野[台地]④）、「（乾燥したものを）すべて人力で運んだ。運搬具としてはショイハゴ（三角形の箱）、苗カゴ、ヤヘウマ（背負い梯子）を用いた」（上野[低地]⑬）、「（乾燥後に）リヤカーで運び、軒下に保管した」（上野[低地]⑳）、「（中学２～３年生のころ）ムシロを曳いて５～６枚を運んだ」「リヤカーも使ったが、ムシロより２～３枚ほど多く運べる程度だったので、主にムシロを使用した」（上野[低地]⑯）などの証言からわかるように、人力による運搬もみられた。運搬具として、ショイカゴ、ショイハゴ、苗カゴ、苗を運ぶ木の箱、ヤヘウマ、リヤカーなどが用いられた。

運ばない

上野地区の昭和１６年生まれの男性（上野[台地]⑤）は、運搬せずに放置した。シグボがヘギを掘った際の副産物であったことと、田の端での暖を採る程度の利用目的であったこと（必要性の低さ）に由来する。上北地区の昭和１７年生まれの男性は、「放置されているものを持って行っても何もいわれなかった」「みんなのモノというか、昔はそのようなことにうるさくなかった」（上野[低地]㉑）という。

(8)保管

運搬や乾燥とも関連するが、自宅へ運搬する場合、または保管が二次的乾燥を兼ねる場合には、自宅で保管することが一般的であった。保管場所は自宅や出作り先の納屋や小屋であった。「降雪前に一坪ほどの量を小屋の中に保管しておいた」（上野[台地]③）、「軒下に保管した」（上野[台地]④）、「自宅の納屋に保管した」（上野[低地]⑬）、「毎年採掘したものを自宅へと運んでストックしておき、２～３年のローテーションで古いものから使用した」（上野[低地]㉒）、「小屋の軒下に保管して更に乾燥させた」（上野[低地]㉒）、「自宅の雨にあたらぬ場所に保管」（上野[低地]⑥⑩）などの証言がそれをものがたる。「湿地に建てた農作業小屋の軒下に積み重ねて保管した」（上野[低地]⑲）、「田の小屋に積み重ねて乾燥している光景を見た」（上野[台地]⑨）というように、採掘場所に近くに建てられた小屋の軒下に保管するという事例もみられた。

(9)用途

A.燃料

A-1暖房(採暖)

燃料としての用途のひとつは、暖房（採暖）である。シグボは「マキがわり」（代用燃料）である（上野[台地]①⑨）という人もいた。今回の調査で、シグボを暖房（採暖）に利用したという話者は、上野[台地]①②⑤⑥⑧⑨⑩⑨、上野[低地]⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲の１９名にのぼった。用いられかたはさまざまで、別の燃料とあわせて使用したという例もあり、併用されたのはマキ（上野[台地]⑥、上野[低地]⑬、榎林⑳㉑）、牛糞（上野[台地]⑧）などであった。上北町の中心部周辺は、木材の集散地であったこともあって、周囲の山林から採取するマキ以外にも、マキや製材所から出る廃材（ジャッパ木）の入手が容易であった（上野[台地]⑤、上野[低地]⑬⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲。うち、上野[低地]⑬㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲は本人または家族が製材所勤務）。

聞き取りのなかで「マキ」という語が用いられることが多かったが、「マキもマキ、それこそ柴な」「マキですよ。割って燃やすということにはなかった。みんな柴です」（上野[台地]①）というように、「マキ」と呼ばれるものは、木の幹を割った立派なものではなく、拾い集めた枝葉のことである。

・自宅の炉やマキストーブへの使用

シグボを暖房（採暖）に使用する場合の設備は、古くはロ／シボド／ロブデ（囲炉）であった（上野[台地]⑥、上野[低地]⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲、榎林⑳㉑）が、時代が下るとマキストーブへと変わった（上野[台地]⑨、上野[低地]⑬⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲、榎林⑳㉑）。これらは、マキストーブへと設備が変わってもなおシグボを利用していたという証言である。「マキストーブ以前」（榎林⑳㉑）まではシグボが使われていた、つまり、マキストーブを利用するようになって、燃料がシグボからマキへと変わったという証言もある。

・自宅のコタツや火鉢での使用

シグボを「コタツの燃料として用いた」という証言も複数あった（上野[台地]①、上野[低地]⑬⑲㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲）。シグボの煙が出なくなった頃を見計らってコタツの中に入れた（上野[台地]①）、つまりシグボの熾が用いられた（上野[台地]①上野[低地]⑬⑲㉑）。「炭の代用品である」（上野[低地]⑯）という認識も示された。こういった話は、津軽地方や下北地方での筆者の調査では聞かれなかった。冬季の気候が比較的穏やかな太平洋側の地域ならではの特徴ではないだろうか。ちなみに上北地区の昭和２年生まれの女性（上野[低地]㉒）は、シグボを炉の燃料として用いたが、コタツの熱源としてはクンタン（燠炭）と炭を用いた。クンタンを用いるのは「炭の経済のため」だという。

「火鉢類にも使用した」（上野[低地]⑨）という証言もあった。「マキのようにボウボウと燃え上がらないから」都合がよいのだという。

・出作小屋や屋外での使用

出作り小屋での採暖（上野[台地]①③）、屋外での採暖（上野[台地]⑤⑧⑨、上野[低地]②③④）など、自宅から離れた場所での採暖に利用された。いずれも田植え時における利用であり、具体的には「田植えの時期はヤマセが吹いて寒かったのでシグボを田の端で焚いて暖を採った。枯れ木などの燃料が少なかったので重宝した」（上野[台地]⑤）、「ヤマセが吹いて寒いとき（に使用した）」（上野[低地]④）、「昔は今のようによい防寒具がなくて寒かったので、オゴリ（熾）を寄せ集めて暖を採るのに重宝した」（上野[低地]⑥）と語る人があった。フナやナマズなど田や堰で捕らえた魚を出作小屋で調理する際には柴が燃やされたが、「朝までいる時はシグボを燃やして暖をとった」（上野[台地]①）というように、目的に合った火を得るために燃料の使い分けがおこなわれた。

・使用しない

シグボを使用した経験がないという人もいる（上野[台地]⑫⑬⑭、上野[低地]②③④、榎林④、原久保⑤、狐久保⑥、浜台⑦）。

A-2炊事

シグボの主要な用途として炊事が挙げられる。上野[台地]④⑥、上野[低地]⑬⑭⑮、榎林④の事例では、飯炊きにシグボを利用したことを確認した。これら6事例中5事例では、シグボと他の燃料（主に木材）を併用していた。昭和17年生まれ男性（上野[低地]⑮）は、「シグボだけでも結構燃えた」というが、しかしやはり火力が欲しいときには柴を混ぜ焚きしたという。木材を併用する理由としては、この地域が津軽平野ほどに広大な湿地帯ではないので、比較的容易に「近隣の山から木材を入手」（上野[台地]①）できたことや、木材の集散地であった当地では「マギ工場」（製材所）からの「ハジギ」「ジャッパ」「ミミシリ」（端材）を入手することができた（上野[台地]⑤、上野[低地]⑬⑭⑮）ことが考えられる。「それでも足りない場合は、シグボを掘って燃料にした」（上野[低地]⑬）というから、炊飯においては、シグボは補助的な位置づけにあったとも考えられる。このことは、炊事にはシグボよりも主として木材を使用したと答えた人が、上野[台地]①③⑤⑫⑬⑭⑮⑯、舟ヶ沢③、浜台⑦の計9事例と比較的多かったことから肯われる。しかし、ながらくこの地方では炊き干し法ではなく、むしろナベの調理にふさわしい混炊や粥、粉食等が主体であったと考えられるので、一気に炊きあげるような強力な火が果たして必要であったかということにも留意しなければならない。飯炊きには火力が必要であるという認識は、カマド（改良カマド）という近代的設備とともに導入された知識かもしれない。ほかに、モミヌガ（粃）を使用した（上野[台地]⑪⑬）という事例もあった。この場合には「ヌカガマ」が使用された。

以下、どのような設備で炊事がおこなわれたかをまとめた（ただし燃料の別を問わない）。

・囲炉

炊事の設備は、多くの場合「シボド」「ロブヂ」「ロ」（囲炉）と「カギツギ」（自在鉤）であり、「ナベ」「ツルスナベ」「ツルつだナベ」（弦鍋）が煮炊きの道具として用いられた。「しばらくナベでばかりご飯を炊いていました」（上野[台地]①）、「みなどごのうちでも（ナベで炊飯しました）」（上野[台地]③）、「オレたちは殆どロ（炉）でばかり炊事をした」（上野[低地]⑬）、「カマドなんかなくて、ロ（炉）で。こんな大きなナベをかけてね。吊して。それが普通でした」（上野[低地]②）というように、古くは炊事の設備としては囲炉が一般的であった（上野[台地]①③⑤⑥⑫⑬⑭⑮⑯榎林④浜台⑦中志⑧）。使用されていた時代については、「昭和20年代」（上野[低地]⑤榎林④）、「昭和20年に嫁いだころ」（上野[台地]⑫）という証言から、炉が用いられたのはおよそ昭和20年代までで、20年代後半から30年代にかけてマキストーブ、場合によっては改良カマドの類が導入されたようである。旧来式のカマドを日常的に利用していた例は、少ない。「遊びに行った先ではカマドで炊飯していた」（上野[低地]⑬）という証言である。この家はいわゆる大宅であった。

・マキストーブ

暖房器具としてストーブ（マキストーブ）が普及するにしたがい、炊事にもストーブを使用するようになったという事例（上野[台地]⑤⑫、上野[低地]⑬、榎林④、中志⑧）がみられる。ただしこの場合、燃料として用いられたものの多くは木材であった。ストーブを導入して以降、はじめてツバガマを使用するようになった事例（上野[台地]⑤⑫、榎林④）もある。また、はじめはマキストーブにナベを組み合わせていたが、途中からツバガマへと変化したという事例（中志⑧）もみられた。

青森県内では、しばしばマキストーブが炊事に用いられていたことを考えると、これがある意味改良カマドの役割を担ったと捉えることもできる。煙道（煙突）という要素は、改良カマドの特徴のひとつである。

・改良カマド

一方で、この地域ではいわゆる改良カマドの導入もおこなわれていたようである。「赤土を固めて作ったカマド」（上野[台地]⑥）、「レンガ積みのカマド」（上野[台地]⑭）、「土間のカマドを経て、マキストーブへ」（榎林⑭）、「カマドを築いた」（舟ヶ沢⑬）、「ガスになる前に2口のカマドを少し使った」（浜台⑯）などの証言である。これらすべてがいわゆる改良カマドであったという確証はないが、上野[台地]⑭の事例ではカマドの利点を「どこにも火が逃げない」熱効率の良さであると語っているし、築かれた時期が「昭和37年から38年ころ」（舟ヶ沢⑬）、「ガスを使用する前」（浜台⑯）であることなどからみると、カマドの機能的側面や築かれた時代から、これらのカマドは旧式の土カマドではないと思われる。また、「ヌガやるカマ」（上野[台地]⑪）、「粃殻のストーブ」（上野[台地]⑬）を使用していたという証言もある。いわゆる粃殻竈（ヌカガマ）の類いである。導入時期は昭和31年（上野[台地]⑪）とされ、「ツバガマ」とセットで使った（上野[台地]⑬）という。今でいう自動炊飯器に相当するものであるが、これもまた改良カマドに匹敵する新種の道具と新たな方法の出現であった。

・屋内でコンロ(焔炉)やシチリン(七輪)

一人暮らしの女性（上野[低地]⑱）の事例では、マキストーブのほかにコンロも飯炊きに用いたという。この女性の近くに住む女性も七輪で湯をわかした（上野[低地]⑳）。当地方では、木枠に土を固めて作った小さな移動式の簡易カマドを「クド」と言っていたが、津軽地方でも七厘のことをクド、南部地方でも炉やコンロのことをクドというように、道具の系譜からいえば囲炉とカマドをつなぐ位置にある火の具を「クド」と称して用いた。コンロを飯炊きに用いるという事例は、囲炉での炊事が変化した姿であると捉えることができる。混炊や粥が中心であったから、それほど強い火力も必要ではなかったと思われる。



クド（旧小川原湖歴史民俗博物館）

・屋内の炉でゴドグ(鉄輪)

鉄輪もシグボの火を調理に用いる際に便利な用具であった。「三角なんとかという三本あるもの」をシグボの上に置いて、ヤカンを載せたりシグボの側にヤカンを置いたりして「いつでも茶が飲めるように」湯温を保つという使いかた（上野[台地]④）や、堰で釣ったドジョウや魚を空き缶に入れて、屋外で「小さなゴドグ」にかけて「塩や味噌で味付けしてみんなで食べた」（上野[台地]④）、「煮物や汁物シグボの熾火を炉の隅に寄せてゴドグの上にナベを置いて調理した」（上野[低地]⑱）という証言があった。調理に用いられたのは、シグボの熾であった。穏やかな火にはその性質にみあう用途があった。保温や少量の加熱に適していたのである。

・屋外での調理

屋外も、シグボや柴を燃料とした調理の場であった。煙が強いシグボを利用するには、屋外がむしろ適していた。鉄輪ひとつとシグボのオゴリ（熾火）があれば、そこは出張台所となった。「沼（小川原湖）のほうで田植えをする際に、茅葺きの簡素な出作小屋を建てて作業をしたが、田で捕らえたナマズやフナを焼いて食べた（この事例の燃料は柴）」（上野[台地]①）という証言や、堰で釣ったドジョウや魚を空き缶に入れて、屋外で「小さなゴドグ」にかけて「塩や味噌で味付けしてみんなで食べた（この事例はシグボ）」（上野[台地]④）、「屋外での農作業時に野菜の汁物を煮たり、塩マスや鯛を焼くために、シグボの熾火（オゴリ）を寄せあつめて鉄輪の下に置いて加熱した」（上野[低地]⑱）などの証言からは、調理の様式や場の多様なありかたがみえてくる。

上記から言えることは、上北地方も津軽地方や下北地方と同様、古くは囲炉が炊事の主要な設備であったということである。聞き取りでさかのぼれる年代（昭和初期～20年代ころ）についていえば、用いられた燃料はマキ（柴や葉）が割合多く、シグボもマキとあわせて用いられた場合が多いとみられる。より古い時代については不明である。また、炉が潰された後にマキストーブが置かれた事例と、竈（粃殻竈や改良かまど）の導入された事例がおおよそ半々であるが、こういった設備の改善にともなって、はじめて羽釜が使用されている。マキストーブ導入後も依然としてナベを用いた場合も多い。長らく用いられてきた囲炉は、暖房と調理を兼ねるものであったが、マキストーブもまたその性格を引き継ぐものであった（マキストーブの登場によって囲炉から失われた照明の機能は、電灯によって補われた）。筆者の調査では、県内の他地方、すなわち津軽地方や下北地方で囲炉の調理を引き継いだ火の道具は圧倒的にマキストーブであった。戦後の生活改善の主題であった「煙道」や「さな」（ロストル）が付属した竈（改良かまど）の導入は、県内の特に農村部では一般的ではなく、むしろその役割を担ったのはマキストーブであった。その移行の時期は、昭和20年代後半から30年代にかけてが一般的であったようだ。

燃料の変遷に伴う飯炊きの設備と道具の変化について

地域	設備[燃料]+被加熱具(使用年代)[容量]
上野[台地]①	炉[マキ]+ナベ
上野[台地]②	炉[マキ]+ナベ
上野[台地]⑤	炉[マキ：端材]+ナベ →マキストーブ[端材]+ツバガマ（昭和20年代）
上野[台地]⑥	炉[シグボ、マキ]+ナベ →土カマド[マキ]
上野[台地]⑪	→ヌカガマ[籾殻]+ツバガマ（昭和30年代）→ガス釜→電気釜【1.5～2升炊】
上野[台地]⑫	炉[マキ]（昭和20年頃） →マキストーブ+ツバガマ →電気釜
上野[台地]⑬	炉[マキ] →ヌカガマ[籾殻]+ツバガマ →電気釜
上野[台地]⑭	炉[マキ]+ナベ →レンガ積カマド[マキ]+ツバガマ+保温ジャー【5升】→保温式電気釜
上野[低地]⑬	炉[シグボ+端材]+ナベ
上野[低地]⑭	→マキストーブ[マキ] →ガス（昭和30年代） →電気釜（昭和40年代）
上野[低地]⑯	炉[マキ]
上野[低地]⑳	炉[シグボ+マキ]（昭和20年代）→△マキストーブ[シグボ+マキ]（昭和20年代）※炊事への利用は不明
上野[低地]㉑	炉[ジャッパ] →マキストーブ
上野[低地]㉒	→ヌカガマか※他家での見聞
上野[低地]㉓	炉 →マキストーブ[マキ]+ナベ
榎林㉔	炉[シグボ+マキ]（昭和20年代）→土間のカマド →マキストーブ+ツバガマ →電気釜
舟ヶ沢㉕	→カマド[マキ]+ツバガマ（昭和37-38年頃）
浜台㉖	炉[マキ]+ナベ →カマド[マキ]（短期間） →ガス釜
中志㉗	炉[マキ]（戦前） →マキストーブ+ナベ →マキストーブ+ツバガマ →ガス釜 →電気釜

A-3 火の保持(火種)

シグボの火持ちのよさは、原野火災では問題になった。夏の日照りで自然発火し、地下で長時間くすぶり続けたということが江戸時代の書物に記されている⁴⁶⁾。近年、県内の湿原で原野火災があり、その時は鎮火までに5日を要した⁴⁷⁾。

しかし、消えにくいということはすなわち火種の保持という目的にとっては利点である。上北町上野では、家の中でシグボなどを常時燻らせておき、火種とした。一度火をつけると、「いくら消しても消えない」くらい、何週間もくすぶりつづけていたという（上野[台地]③）。燻るシグボの上に別の生乾きのシグボを上げると翌朝にはオゴリ（熾）になっていたといい、その繰り返しによって火を絶やすことなく次々とシグボを乾燥させ、燃焼させることができた（上野[低地]⑩）。「マッチがわり」にしたという証言もある。「昔、タバコをのむには煙管を使っただでしょ。煙管だから、シグボに火をつけて。シグボはいつもバヤバヤバヤって燃えているんだよ。だから、タバコの火のかわりに。マッチなんて金がかかるからね。マッチだといちいち擦らないといけないけど、シグボだと燃えているから、大きい塊をこうやってタバコに火をつけたりしていたよ」（上野[低地]㉔）。

A-4 糸煮(カマヤギ)

項目A-1のコタツでの利用や、A-3の火種としての利用からわかるように、シグボには、その種類にもよるが、火持ちがよく穏やかであるという燃料としての特性がある。穏やかな火は、湯の保温や料理の煮込み、コタツやアンカ、ヒバチなどの熱源に適している。また、項目A-3でみたように、一度火をつけると、「いくら消しても消えない」くらい、何週間もくすぶりつづけるという特性は、火種に適していた。これらの特性は、カマヤギ（糸煮）に活かされた。

上北町上野の昭和8年生まれの男性（上野[台地]③）によると、子どものころ、この地域では麻糸づくりが盛んであったという。「昔あったんだ。オレが子どものとき。昔の人はよく、シグボでカマヤギしたんだ。木を燃したり、木の代わりにシグボ燃やして。麻をこのあたりにたくさん植えていたでしょう。それを大きいドラム缶のようなカマで煮て、その下にシグボを入れて、よくやったんだ。夜寝るときは、シグボ。マキばかりだと大変でしょう。だから、シグボだと消えないでずっと火種が残っているから。朝になるとまたマキを入れて。シグボだと、火力もないし、火も消えないから（いいんです）」（上野[台地]③）。つまり、麻を煮るときにはマキを用い、夜間は湯温と火種を保つためにシグボを用いたというのである。朝になるとふたたび火力を上げるためにマキをくべた。「マキばかりだと大変でしょう」という発言は、シグボが穏やかで持続する安定的な燃料として利点を持つということに加え、経済的な

利点もあったということを意味している。

ところで、明治時代なかごろの上北郡は、栃木県都賀郡、同鹿沼郡と並ぶ大麻の一大産地であった。青森県は、上北地方の大麻栽培の改良と普及を目指し、明治25年に栃木県から大麻改良教師として新堀清三郎を招聘し、七戸村に在駐させている⁴⁸⁾。聞き取りをおこなった上野地区もイト（麻糸）作りが盛んであった。共同のイトガマ（イドニガマ、糸煮釜）を築き、「長いタル」（麻蒸桶）を被せ麻を蒸した。昭和6年生まれ女性の女性は次のように語る。「ここにイトガマといって、長い長いタルをかぶせてね。麻に被せて、蒸したんだよね。その麻の皮を剥いで、ちょうど私くらいの世代でこのイトハギ（糸剥ぎ）も終わったでしょうね。ここに、イトガマがあったんだものねえ。みんなで使うように、ここにあったんだものね。長いタルのようなものを被せてね、その下で火を燃やせば、そのイギ（蒸気）で蒸れて。麻蒸しは男の人たちがみんな来て手伝わなければ、できなかったものですよ。」（上野[台地]⑬）。イトづくりはこの女性の世代が最後であったという。「それを織ってね。キケ（織機）で織って、子どもたちが小さいとき、まだ学校に入っているとき、モンペだといってね、こんなのを作って穿かせたよ。今ならね、お金さえあれば何でもあるんだっていったって、（当時は）何もないから」（同前）。十和田市大沢田字牛鍵の昭和13年生まれの女性は、川端の釜場でカマヤギ（糸煮）をした。「今は麻を植えられないから、植えないでしょうね。私はね、実家で麻糸づくりをしたんです。カマで煮て、その時は燃料はマキでしたねえ。みんな山から、ジャラキ（雑木）を、股になったようなのを刈ってきてね、そして村なら村がひとつになってね、そして煮てたんだもの。だから今日は私、次は私、って言って川端で、煮ればすぐに水に浸けて、皮を剥いで。私たちが小さいときですよ」（上野[台地]⑭）。同氏は、子どもの頃に麻で織った着物を身につけていたという。これらの証言からは、この地域では少なくとも昭和20年代後半ころまで麻の栽培と麻の衣が着用されていたことが想像される。「麻は戦後の昭和三十年ごろまで作っていた」⁴⁹⁾「昭和二十二年ごろまで麻を植えていた（榎林）」⁵⁰⁾という記録からも肯かれる。

B.燃料以外

泥炭の用途は多様である。世界的には、麦芽の乾燥、敷きわら、泥炭紙、泥炭ローソク、皮なめし、窯業、アルコールの抽出、充填剤、浄化剤、脱臭剤、建築材料、保水剤、泥炭浴などの用途が知られる⁵¹⁾。今回の調査では、燃料以外の用途としては土壌改良剤や肥料としての利用に関する証言を得た。この場合、シグボを燃やして出るアク（灰）が利用された。シグボのアクのみならず、一般的に囲炉から出るアクはアクヤ（アクゴヤ）と呼ばれる小屋などに貯めておかれ、活用された。炉の灰だけでは足りず、道ばたの草なども燃やして作るほど灰は貴重であり、「カラヤゲば（怠ければ）アクもない」という警句があったといわれる⁵²⁾。多量の灰を生み出すという点で、シグボは好都合だった。「シグボの灰は、酸性をアルカリ性にするために使いました。土壌を中和させるんです。石灰のかわりに、石灰がないからシグボの灰を使いました」（上野[台地]④）というように、酸性土壌を中和させるためにシグボの灰が用いられた。

また、アク（灰）と種（ヒエ、ソバなど）とゲス（肥料）とを混ぜて撒くことで、作業が省力化・合理化された。ゲスタル（肥桶）のなかで小便を入れてこれらをよく混ぜ、素手で撒いたという。「シグボの灰を肥料の代わりに使いました。畑でも田でも。多くは畑に使いました」（上野[台地]⑥）、「シグボの灰を畑に散らして昔は使ったんです。粟や稗などを昔は蒔きましたからね。田植えでも畑でも、肥料がそれほどありませんでしたからね。今だと人糞はみんな捨てますが、昔はみな人糞を混ぜて、シグボの灰を混ぜて、使ったんですよ」（上野[台地]⑦）、「シグボの灰は全部使いました。畑に撒いたりして。あとは人糞でしょ。昔はアレを手で撒いたんですよ。素手で。ゴムテブクロなんてあるわけでないから」（上野[台地]⑨）。これらの証言から、シグボの灰が人糞と混合されて肥料として用いられていたことがわかる。

また、シグボや木を燃やして出た灰は、畑に撒くと「湿気取り」になるとも考えられていた。「このあたりの土地は湿気があるものですから、灰を撒くと湿気がなくなるといって、混ぜていた人がいましたよ」（上野[低地]⑳）。

(10)火の操作

火の具体的な制御法についての証言は、上野の低地部で比較的多く得られた（項目10-A）。それは、シグボへの依存の度合いが比較的高かったからだと思う。

シグボの火の燃え方についての形容が豊かだったのもこの地域で、「バーバとは燃えずポッポッと燃える」（上野[低地]㉑）、「（カステラのように）ホフホフと燃える」（上野[低地]㉒）、「ボウボウとは燃えずブシブシと燃える」（上野[低地]㉓）、「バヤバヤバヤバヤ、ブスブスブスブスと燃える」（上野[低地]㉔）「ボウボウと燃えず」「ホコホコと暖かかった」（上野[低地]㉕）などの表現が聞かれた。いずれも、シグボの火の燃え方の穏やかさを伝えるものだが、同時に、シグボ（の燃え方）への関心の高さをも物語っているように思われる。

A.着火

昭和16年生まれの女性が「簡単に燃えるものではない」（上野[低地]⑭）と語るように、シグボはその質にもよるが一般的には着火するのが容易ではなかった。「火をつけるのにシグボに直接マッチをつけても、それほど燃えないわけでもないでしょうけど、杉の葉なんかを混ぜて」着火したという（上野[低地]⑮）。また、貴重な硫黄マッチをできるだけ使わなくてもよいように、シグボを炉の端に置いて常に火を維持していたと語る昭和14年生まれの男性は、シグボに着火する際に「フツと息を吹きかけて火をつけた」（上野[台地]④）。以上のように、着火の際には、助燃材を加えたり、空気の通りをよくしたりする工夫が必要だった。そのような労力を省くためにも、穏やかに持続するシグボの火の特性は火種の保持に活用された（次項）。

B.維持

シグボは火がつきにくい反面、一度火がつくと消えにくいという特性があった。「火が消えないから、昔は一旦火がつくと消えずに一週間も二週間も燻っていたんだ。いくら消しても消えない。それくらい、繊維があったんでしょね」（上野[台地]③）。「燃えてしまえば、炭と同じでゴウゴウと暖かいんですよ。結構持つなあ。5～6枚くらいで、3～4時間持つのではないのでしょうか」（上野[低地]⑯）と人々は語る。こういった特性を活かし、火種として用いられた。くすぶるシグボの上に生乾きのシグボを上げると、生乾きのシグボが徐々に乾燥して火がつき、次の生乾きのシグボを乾燥させるための火となる、ということを繰り返すことにより、シグボの乾燥と同時に火を維持することもおこなわれた（上野[低地]⑯、A-3参照）。

上記のように、生乾きのシグボを上げておくすぶり続けるほど消えにくいものではあったが、より長く火を持続させるための工夫もなされた。ひとつは、積み重ね方の工夫である。「イロリに、三角形に立てて風通りをよくして（燃やした）」（上野[台地]④）、「2～3段、5つか6つを積み上げて火を燃やすのでないでしょうか。シグボだけでも燃えます。段を組めばね」（上野[低地]⑰）、「やっぱり小さくしなければ、火が抜けるところを作らないと、火が燃えないでしょう。空気が出るくらいの大きさ、レンガの半分くらいを立てかけて」（上野[低地]⑱）などの証言がそれをものとする。

いま一つは、他の燃料との組み合わせである。「先に木材を2～3本置いて、シグボを3～5枚くらい重ねて（使用した）」（上野[低地]⑲）、「ボウボウとは燃えないけども、ポッポッと燃えるんですよ。石炭のようにはいかないけれど、炭みたいにポッポと燃えるんですよ。（中略）燃えが悪いときには木と一緒に入れて（使用した）」（上野[低地]⑲）、「広い土地や庭の隅とかではシグボだけで燃やしましたが、うちで燃やすときにはシグボだけではなくて木も混ぜて燃やしましたよ」（榎林⑳）。朝晩で、燃料を交替させるという用い方もあった。カマヤギ（糸煮）の際に、日中はマキで火力をあげ、夜間はシグボで火種と湯温の維持をおこなった（上野[台地]③）。

昭和6年生まれの女性からは、火の調整に大根を用いたというユニークな話を聞いた。「ご飯が炊きあがったところを見計らい、燃えさしを脇によけて、大根をポツと真ん中に置いたりしたんですよ。火の中に。そうすれば、熱くないでしょう。ご飯が焦げないでしょう。いろんな工夫しましたよ」（上野[台地]㉑）。ただし、燃料として用いられたのはマキであった。この女性は、シグボについて知識としては知っているが、使用したことはなかったという。

C.始末

火種の保存法についての具体的な証言は得られなかった。煙が出なくなったところを見計らって炉から移動させ、刎を焼いたものとともにコタツの燃料とした（上野[台地]①）という証言があったが、これはシグボの熾の利用法である。

(11)副産物

A.煙

煙が多量に出たという証言もあれば、逆にあまり出なかったという証言もあった。煙が出るという証言は上野の台地部に多く、出ないという証言は上野の低地部に多い。理由のひとつとして、シグボの質の違いが考えられる。

しかし「燃やしていれば煙が出なくなるんですよ」（上野[台地]①）、「最初煙がボウボウと出て、ある程度経つと炎だけになって赤くなります」（上野[台地]④）というように、シグボは着火時と熾の状態とでは煙の出方が異なることから、話者はどちらか一方の状態だけを説明している可能性もある。いずれにしても、当事者にとってより印象深い光景が象徴的・選択的に語られていることは確かである。

・煙はあまり出なかった

「（煙は）それほどでもないんですよ。ポッポと燃えないんですよ。炭と同じです。燃えてしまうまで、赤く燃えているんですよ」（上野[台地]①）、「煙はね、そんなに出不いの。ちょっと出るけど、後は燃えてしまえば炭

と同じで、ゴンゴンゴンゴと暖かいんだよ」(上野[低地]⑱)、「煙はそれほど出ないの。煙出るといことは、水分があるから煙が出るんだから、きちんと乾燥すれば何も(出ません)」(上野[低地]⑳)、「石炭を燃やしたように青くとまではいかないけれど、あまり煙も出なかったし、乾いているから」(上野[低地]㉑)、「煙もちょこっと出たんでしょうか、まずそんなに煙も出ないと思います」(上野[低地]㉒)などの証言からは、よく乾燥したシグボは、着火時に煙が出るものの、その後はほとんど煙が出ずに燃え続けるものであると認識されていることがわかる。

・煙が多量に出た

「シグボは燃やすことはできません。煙がもうもうと出て。簡単に燃えないんですもの」(上野[台地]③)、「煙はまあ出ますが、家が大きいの、煙が出る穴、ハホから出ますからね」(上野[台地]⑥)、「簡単に燃えるものではないし、火がついてボウボウと燃えるものではないし、ブスブスと煙が出て燃える程度のものですから」(上野[低地]㉔)、「各家がそれぞれの田で燃やすので、あちらこちらから煙があがり、ひどく煙たかった」(上野[低地]㉕)などの証言からは、シグボが燃えにくいものであり、燃えても煙がひどいという印象を抱いている人がいることがわかる。上述のうち、煙が出て大変だという証言(上野[台地]③)は戸外でのカマヤギ(糸煮)に伴うものであり、ブスブスと燻るという証言(上野[低地]㉔)は田植え時の採暖に用いたという例である。いずれも、家の中ではなく屋外で使用している。いっぽう、屋内で利用する場合には、「草屋根ですから、煙が染みこんで屋根が腐らなかったんですよ」(上野[台地]⑥)というように、鼠や害虫の駆除、建材に耐久性を与えるなどの利点もあった。

煙にまつわるほほえましいエピソードも聞かれた。昭和7年生まれの女性(上野[低地]㉙)は、子どものころ、友人宅に遊びに行くとその家のお爺さんから火をすすめられた。「大きなロ(炉)にシグボを燃やして、(お爺さんが)『ほら、お前たちもあたれ』って言ってね。すると煙たいでしょう。『煙がこっちに来るよ』というのと、『オナゴいのさ(魅力的な女性のところに)煙が行くんだ』と喋ってね。そうやって燃やしていたんですよ」。

B.臭気

ニオイについて強烈な印象をもって語る人はなかった。上野地区の昭和8年生まれの男性(上野[台地]③)は、シグボは火種として常時煙らせていたが「ニオイは別に気にならなかった」という。同じく昭和6年生まれの男性(上野[台地]⑥)は、燃料として屋内でマキと併用したが「ニオイはしますよ、いくらかね。でもそれほどでもありません」と語る。上野の昭和2年生まれの男性(上野[低地]⑱)は、燃料として屋内で製材所の端材と併用したが、煙はあまり出ず「ニオイもない」という。上野の昭和7年生まれの女性(上野[低地]㉙)は、「ニオイは結構、草を燃やしたような、木のニオイとはまた少し違ってね。でもそのニオイまで言葉で表現する力がありません」と語る。上述の上野[台地]③の事例は、炉で主に木材を使用しているし、上野[台地]⑥および同⑱は、シグボと木材を併用している。シグボ単独ではなくマキや端材と併せて用いたことがニオイの軽減に繋がっていたのかもしれない。津軽地方や下北地方で語られるような、ニオイにまつわるエピソードもなかった。

C.灰

上野地区に住む昭和6年生まれの男性(上野[台地]①)は、シグボの灰を稲作に利用したのではないかと考えている。小屋(出作小屋)などで採暖の際にシグボを燃料として用い、それをそのまま田にまき散らしたのではないかといい。

シグボだけを燃やした灰(シグボだけのアグ)は熾火としてコタツなどに用い、シグボと木を混ぜて燃やした灰(シグボと木のアグ)は畑に撒く、といった使い分けもなされていた(上野[低地]㉚)。

3-2 アンタン

今回の調査では「アンタン」と呼ばれる燃料も自家用に採掘され、利用されていたということがわかった。断定はできないが、「アンタン」と呼ばれているものは、いわゆる「亜炭」に相当するものであると推察される。それは後述する『天間林村史』等に、この地域ではかつて亜炭が採掘されていたことが記されているからである。「亜炭」は「褐炭」のことであり、明治33(1900)年の鉱物条例改正にともなって石炭に次ぐものを示す語として⁵³⁾、行政上名付けられた日本独自の名称である⁵⁴⁾。また、「アンタン」という呼称は、「亜炭(あたん)」が訛ったものではなく「暗炭(あんたん)」という語に由来すると考えられる。暗炭とは炭塊表面や断面の光沢が弱い石炭の総称で、「炭化の進んだ瀝青炭や無煙炭でも灰分が多いと暗炭となる」⁵⁵⁾、つまり炭化の高低とは別の観点にもとづく用語である。水分・灰分の多い褐炭にも暗炭が多い⁵⁶⁾といわれる。暗炭という語は庶民にとって一般的な用語であったと思われるが、この地域には亜炭を商業的に採掘する業者が出入りしていたという証言があることから、外部の知識が地域住民の間で一般化され、「アンタン」と呼び習わされるようになったのではないだろうか。

亜炭は昭和12～13（1937-38）年頃は仙台やその近郊で風呂燃料として使用されていたに過ぎず、「家庭用の代用石炭としての発展時代」であったが、昭和16（1941）年なかば頃から石炭が軍需に向けられるようになった結果、平和産業の需要に応える代替燃料として脚光を浴び始めたといわれる⁵⁷⁾。当時は、①石炭のように北海道や九州ではなく、本州を中心に産出することから、船舶を使用せずとも陸上交通だけで運搬できること、②石炭に比べて浅い層にあり採掘が容易であること、等が利点であると考えられていた⁵⁸⁾。戦後は産業復興のために一時的に需要が高まり、昭和22年の生産量は戦前以来最高記録を示したが、その後エネルギー消費の構成が変化するとともに生産が著しく減少していった⁵⁹⁾。

本県における亜炭の採掘については『天間林村史』（旧上北郡天間林村）に、戦時中に各所に亜炭田があって燃料用に採掘されていたということが記されている⁶⁰⁾。東北六県中最も埋蔵量が少ない⁶¹⁾とされる青森県内でも亜炭の採掘がおこなわれたのは、代用石炭としての需要を見込んでのことではないだろうか。だが『天間林村史』に「実態は不明」⁶²⁾と記されるように、亜炭鉱の分布や、採掘の目的、利用の状況等は明らかではない。昭和29（1954）年の上北亜炭田における花粉分析研究の報告には、この地域の亜炭は上層30-100cm、下層60cmほどの二つの薄層からなり、下層は東に行くほど厚みを増し、**沼崎**（旧上北町）、**李沢**（旧天間林村）、**榎林**（旧天間林村）で幾度か採掘されていたことが記されている⁶³⁾。昭和33（1958）年の報告では、榎林に隣接する**貝塚**（旧天間林村）には、泥岩と火山灰に挟まれた厚さ約60cmの「泥炭質亜炭」があることが示されており、花粉分析からその堆積の時期を4つに区分している⁶⁴⁾。これらの報告は、その趣旨からすれば当然ではあるが、採掘や利用の実態については触れられていない。今回の聞き取り調査では、**榎林**（旧天間林村）で亜炭が自家消費、あるいは商業用として採掘されていたという複数の証言を得た。目下、聞き取りによって得られた情報を記録しておく。

(1)呼称

アンタンと称する人が多くを占める（上野〔低地〕⑬、榎林③⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬）。アタンと称する人もみられた（榎林⑭⑮）。

(2)定義

「シギボは草の枯れたような、ムガムガとしたようなもの」（榎林③⑨）であるのに対し、「アンタンは、木が積み重なったような、炭になる手前のもので、普通の木よりは炭っぽい」（榎林③⑨）、「石炭になる手前のものである」（榎林③⑤⑥）という。更に、昭和24年生まれ男性は「アタンっていう。亜はアジアの亜で」（榎林③⑨）と語る。

(3)入手先

アンタンについては、採掘に関する見聞の記憶を持つ人は取材した12名中11名にのぼった（榎林③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮）。榎林地区では自家用であれ商用であれ、採掘によって燃料が入手されていたことがわかった。

(4)採掘

・採掘されていた年代

昭和10年生まれ男性（榎林⑫）は、昭和20年前後ころにアンタンを採掘していた様子を見ている。昭和19年生まれ男性（榎林③⑤）によると、「昭和20年代半ばころまで（採掘されていた）」といい、昭和17年生まれ男性（榎林③⑨）は、昭和20年代後半に採掘がおこなわれていたと語る。昭和22年生まれ男性（榎林②⑦）は、実際に採掘の様子を見たが、いつ頃まで採掘が行われていたかは定かでないという。これらは直接採掘の様子を目にした人々の証言である。いっぽう、昭和10年生まれ男性（榎林③⑥）は、アンタンについて親から聞いているが「おれたちの時代にはもうなかった」という。昭和22年生まれ男性（榎林④⑪）も、子どもの頃には採掘されておらず、アンタンの廃坑に入って遊んだという。掘っていたのは戦争当時ではないかと語る。昭和24年生まれ男性（榎林③⑨）も、子どもの頃にはすでに採掘や使用はおこなわれていなかったと語る。

これらの証言を総合すると、榎林でアンタンの採掘が盛んにおこなわれていたのは遅くとも昭和20年代までではないかと察せられる。

一方、自家用として昭和40年代ころまで採掘していたとされる家があった。聞き取りのなかで頻りに登場したのは、榎林のt家である（榎林③⑨④⑤）。昭和村でアンタンを使用していたのはt家だけ（榎林④⑤）という人もいて、この地域ではt家が長らく盛んに使用していたために人々の記憶に強く印象づけられたようである。t家では、「昭和30年代後半から40年代前半ころまで」（榎林④⑤）、自家消費として自宅の敷地内からアンタンを採掘しており、「自宅が火災で焼失するまで使用していた」という（榎林④⑤）。

・採掘の目的と理由

自家用燃料としての利用を目的としていた、あるいは地域内の家庭で自家用燃料として使用している様子を見たという証言が複数ある（榎林③⑤⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑮）。家のそばから各家庭で採掘していた（榎林④⑤）というが、そのいっぽうで「レールを敷き、トロッコで運搬して居る様子を見た」（榎林③⑨）、「トロッコの線路を見た」（榎林⑫）、「横穴を

掘って大々的に採掘している様子を見た」(榎林④)、「亜炭を扱う会社の『専門の人』が家族とともに住み込みで採掘をおこなっていた」(榎林④)、「(掘っている人は)このあたりの人ではなかった」(榎林②)などの証言もある。

商業的な採掘を目的とした業者が関わっていた可能性もある。ただし、「トロッコで運搬したあと、乾燥させてから各家庭に運んだ」(榎林③)との証言もあり、アンタンの採掘が、地域的に行われていた面と、専門業者によって商業的におこなわれていた面があり、それらの関係はどのようなものであったのか、不明である。

自家用燃料として使用した人のなかには、採掘の第一の目的は、客土のための土の採取であり、アンタンの採掘は副次的な位置づけであったと語る人(榎林③)がいた。なぜアンタンを使用したかと尋ねると、「どういう理由って、出たから乾かして燃やすだけでしょ」と語気を強めて語った。このあたりはマキ(タキギ)を拾える林も広がっているように思えるが「使えるものは何でも使った」(榎林③)時代であった。榎林地区の昭和19年生まれの男性(榎林⑤)の祖父もアンタンを利用していたが、「ものがなかった時代ですからね。何でも利活用したと思うんだけど」「ただで手に入るから」と語る。氏の祖父が亜炭を利用した理由について「物好き」な人であったためとも語る。

・採掘の場所

『天間林村史』には「戦時中(亜炭の採掘が)各所にみられた」⁶⁵⁾と記されるが、今回の聞き取りで産地についての情報を得られたのは、1か所だけであった。榎林地区の住民は、「二ツ森貝塚史跡公園の手前の低い場所の田の脇」(榎林⑤)「昭和地区の手前の低い場所」(榎林⑦)、「昭和村付近の沢」(榎林③⑧④)でアンタンが採掘されていたと口を揃える。これらはみな同じ場所(p.90 地図×印)を指しているものと思われる。上北町でも、この場所でのアンタン採掘について記憶している人があった(上野[低地]⑧)。

そのアンタンの採掘場所は、榎林本村から昭和地区のある高台へ向かう手前の谷あいにあったようだ。昭和22年生まれの男性によると、当時の採掘跡(p.129写真)の横穴から出る地下水を利用して、現在は養鯉をおこなっている。

その他、「採掘跡の穴が多数あったことは記憶にある(が、場所は定かでない)」(榎林⑥)、「採掘跡が陥没するかもしれないと聞いている」(榎林③)、「採掘の跡地が陥没している場所が山中にある。子どもの頃は危険だから近寄らないように言われていた」(榎林④)という証言を得たが、昭和地区のどの場所であるかについて明確な回答はなかった。

・採掘の時期、主体、方法

「榎林地区の年配の人々はみな掘っていた」(榎林⑤)、「榎林ではみなこぞって採取した」(榎林⑥)との証言がある(ただし、いずれも子どもの頃の記憶であり、本人が採掘に従事したわけではない)。雪の消えた春以降に、客土の作業にともなって男性中心で採掘がおこなわれ、シコップ(スコップ)やモッタ(クワの一種)を用いたのではないかという(榎林③)。「800メートルほどの奥行きのある横穴に松の木の櫓を組んで採掘していた」(榎林④)という証言もある。ただし、「採掘をおこなっていたのはこのあたりの人ではないと思う」(榎林②)という証言もあるので、この坑道が地域の人々によるものなのか、商業的に採掘をおこなっていた業者によるものであったのかは、明らかでない。榎林でアンタンを自家用として使用していたt家のそばには、アンタンを扱う会社の従業員一家が住んでいたという話も聞いた(榎林④)。

(5)乾燥・運搬

「レールを敷設してトロッコで運搬した」(榎林③)、「トロッコの線路があった」(榎林②)という証言がある。トロッコ運搬されたアンタンは次々と積み重ねられていき、天日で自然乾燥され、乾いたところを見計らって「各家庭へ運ばれた」(榎林③)という。地域の人々の家庭用燃料として、共同作業により本格的に採掘・加工・運搬が行われていたことが窺える。また、「(t家だと思うが)昭和村付近で乾燥させているのを見た」(榎林⑦)、「s家の孫婆さんが乾燥させて燃料にしたという話を聞いた」(榎林③)といったように、一部では個人的に採掘して乾燥し、自家用燃料として用いていた場合もあったらしい。

(6)利用

・利用されていた年代

榎林地区では、シギボを利用する人は少なかったようだ。対して、アンタンについては次のように語られた。「昭和20年前後に見た」(榎林②)、「昭和20年代なかばまで(利用されていた)」(榎林⑤)、「昭和20年代後半まで」(榎林③)、「昭和30年代なかばには(利用されていた)」(榎林③)、「昭和40年代前半ころまで」(榎林⑤)。「甲地男に榎林女」の成句がものがたるように、それほど薪炭に恵まれていたわけではなかった榎林で、シギボが使用されることが少なかったのは、アンタンという別の燃料が採れたことと関係があるのではないか。

・用途

昭和17年生まれの男性(榎林③)は、マキの上にアンタンをのせて、屋外でフキなどをナベカマで煮る際に利用したと語る。風呂焚きを含め、屋内では利用することがなかったという。いっぽう、もっぱら風呂焚きに利用したという人もいる(榎林⑤)。

アンタンを燃料に使っていた家として、地域の人々が口を揃えてt家の名前を挙げたことはすでに述べた。「t家の孫婆さんが風呂の燃料にしていた」（榎林④）、「t家で風呂焚きや湯沸かしに利用していた」（榎林④）、「t家で風呂焚きに利用していた」（榎林⑤）などの証言である。t家の隣にあったs家では昭和30年代後半にプロパンが導入された（榎林⑤）というが、t家では昭和40年代までアンタンを利用していたという。使用をやめたのは火災がきっかけではなかったかという話（榎林⑤）もあったが、t家の当主に話を聞いたところ事実ではなかった。

(7)副産物、周辺事象

アンタンを燃やすと、「ニオイと煙が強いのであまり燃料としては（上等なものではなかった）」（榎林⑤）、「ニオイは強くないが煙がすごい」（榎林⑥）という。煙が強いのもっぱら屋外で利用したようである。

採掘後の坑道は、こどもたちの遊び場となったほか、坑道から出る湧き水が利用された（榎林④）。廃坑から流れ出す水を利用して、現在も養殖（鯉）がおこなわれている。

まとめと課題

(1) これまで筆者が報告した津軽地方（岩木川下流域）、下北地方（むつ低地）に加え、本県の上北地方でも、沼崎低地を中心に泥炭が盛んに利用されていたことがわかった。今後、地域ごとの特徴について考察したい。

今回の調査地域内で、採掘や利用の方法に地域的な特徴がみられたのは、東北町（旧上北町）上野の台地部と低地部である。上野の台地部に住む人々は泥炭を広く浅く掘ることが多かったが、低地内に住む人々は「二段掘り」をおこなっていた。乾燥に関しても、台地部に住む人々は、放置して自然乾燥させたり、田のクロに直置きして水も抜けないうちに運んだりするいっぽう、低地部の人々は、ドンコロを渡してシギボを斜めに立てかけたり、八の字形に立てたりしたうえ、ひっくり返して乾燥させ、積み重ねるという丁寧な作業をおこなっていた。また、低地部のほうがシギボの火の燃え方に対する形容が豊富であった。泥炭地内に住む人々の、より繊細な工夫と丁寧な心遣いや、関心の高さを物語っていると考えられる。

(2) 泥炭を利用する動機は、これまで言われてきたように「燃料が乏しいから」⁶⁶⁾ではなく、「泥炭があるから」とであると捉えたい。必ずしも燃料不足の解消といった消極的な事情ばかりではない。泥炭の最大の魅力は、専門的な道具や設備がなくとも、多少の労力を払えば、身近なところから無償で手に入れられることである。「あるものは使う」という庶民のしたたかな生きざまを考えれば、湿地と隣りあう集落や湿地上に拓かれた村では多かれ少なかれ、泥炭を利用してきたのではないだろうか。

(3) 泥炭は、質的にみればある意味最も「下等な」燃料であると考えられている。しかし、強烈な煙に象徴される数々のデメリットを有するものであるという点を措いてもなお、使い方によっては我々が考える以上に往時の庶民にとって泥炭は燃料として「よい」ものであり、ありがたいものであった。たとえば、麻糸づくりでの利用である。糸煮釜の火の強弱を、薪と泥炭の使い分けによって工夫していた。更に、往時は一般的であったナベを用いた炉での混炊、田の端や出作小屋での出張調理や採暖など、泥炭の火には、その火なりのメリットがあることを庶民はよく心得、活用していた。また、燃料以外にも種々の活用法があった。そのことは、「結構、シギボ役にたった」（上野[低地]61）、「すごくいいものだった。今考えてみれば」⁶⁷⁾ということばにもあらわれている。本県における泥炭の利用について述べた書物には、冬期の暖房用燃料であるとする記述が目立つ⁶⁸⁾が、用途は燃料に限定されるものではない。燃料としての用途も暖房だけではなく、冬期のみならず種々の用途に通年利用された。これまで注意されなかった部分に目を向けたい。

(4) アンタン（暗炭、亜炭）と呼ばれる燃料も自家消費用として利用されていた（p. 68-71）。今回聞き取りでその利用が明らかになったのは榎林地区だけだが、『天間林村史』には戦時中に亜炭の採掘が各地でおこなわれていたことが記されており⁶⁹⁾、他の文献にも採掘場所として具体的な地名がみえる⁷⁰⁾。村史の文脈からは代用石炭としての需要という意味合いが見て取れるが、聞き取りではその限りでないことがわかった。東北地方における亜炭の採掘は山形県や宮城県において盛んで、それに比べると青森県での採掘は微々たるものであったためか、目下のところ庶民がどのように利用（自家消費）していたのか、実態は不明である。調査を続けたい。

謝辞 調査にあたり、地域にお住まいの多くの方々のご協力を賜りました。心から感謝を申し上げます。

表 1

No	名	旧町村(大字)	生年		年齢	性別	呼称		利用の有無と年代	入手							
			元号	西暦			泥炭	亜炭		時期	方法	場所	目的	主体	道具・方法		
1	A	上北町(上野)[台地]	昭和6	1931	85	男	シグボ		○	昭和20年代前半まで		採取	湿地	開田/燃料	男	表土を取り除き、タデで切る	
2	B	上北町(上野)[台地]	昭和16	1941	75	女	シギボ		○			採取	湿地	燃料	大人		
3	C	上北町(上野)[台地]	昭和8	1933	83	男	シギボ		○		秋	採取	田	燃料	大人	タデで切り込み角スコップ等で掘り採る	
4	D	上北町(上野)[台地]	昭和14	1939	77	男	シギボ		(○)	(昭和20年代後半まで)		採取/拾得	湿地	水路整備	男	スコップやタデで掘り採る	
5	E	上北町(上野)[台地]	昭和16	1941	75	男	シゴボ		○	昭和34-35年頃まで	秋	採取	田(畑)	水路整備/燃料		スコップで掘り採る	
6	F	上北町(上野)[台地]	昭和4	1929	87	男	シギボ		○	昭和20年前後まで	春	採取	田	燃料		タデで切り込み手で採り上げる	
7	G	上北町(上野)[台地]	昭和5	1930	86	女	シギボ		○	昭和25年以前の話							
8	H	上北町(上野)[台地]	昭和25	1948	68	男	シグボ		○	昭和20年代まで		(採取)		(燃料)			
9	I	上北町(上野)[台地]	昭和17	1942	74	男	シギボ/シグボ		○	昭和30年頃まで	秋冬	採取	田	燃料		タデを使ったと思う	
10	J	上北町(上野)[台地]	昭和8	1933	83	女	シギボ		○	昭和17-18年頃には使用		採取	田/湿地		男女	モッタで起こす	
11	K	上北町(上野)[台地]	昭和11	1936	80	女	シギボ		(○)	(音は利用)							
12	L	上北町(上野)[台地]	昭和2	1927	89	女	シグボ/シギボ		×								
13	M	上北町(上野)[台地]	昭和6	1931	85	女	シグボ		×								
14	N	上北町(上野)[台地]	昭和13	1938	78	女	シグボ		×								
15	O	上北町(上野)[台地]	昭和28	1953	63	男	シギボ		×								
16	P	上北町(上野)[台地]	昭和17	1942	74	男	シグボ		×								
17	Q	上北町(大浦)	昭和11	1936	80	女	シギボ		×								
18	R	上北町(上野)[低地]	昭和2	1927	89	男	シグボ	(アンタン)	○	昭和20年代	毎年または隔年で 春	採取	湿地	燃料		表土をモッタで除きタデで切り込み、モッタで掘り採りタデでスライス	
19	S	上北町(上野)[低地]	昭和7	1932	84	女	シグボ		○	主に戦前	春	採取	湿地	燃料	男	スコップやクワで掘り採る	
20	T	上北町(上野)[低地]	昭和11	1936	80	男	シギボ		○	昭和20年頃まで	通年	採取	湿地	燃料	男	タデで切り込み三本鍬(二本・四本も)で掘り採る	
21	U	上北町(上野)[低地]	昭和17	1942	74	男	シグボ		○	昭和20年代前半頃まで	春秋	採取/拾得	湿地	開田/燃料		スコップ、タデ、カマで掘り採る	
22	V	上北町(上野)[低地]	昭和2	1927	89	女	シギボ		○	昭和23年には使用	通年	採取	湿地	燃料・開田	男		
23	W	上北町(上野)[低地]	昭和16	1941	75	女	シ(ズ)ギボ		(○)	(親の世代)							
24	X	上北町(上野)[低地]	昭和9	1934	82	女	シギボ		○	昭和20年代		採取		開田/田地改良		タデ	
25	Y	上北町(上野)[低地]	昭和7	1932	84	男	シギボ		(○)	(戦前には使用)		(採取)		(燃料)			
26	Z	上北町(上野)[低地]	昭和3	1928	88	男	シグボ/シギボ		(○)	(昭和20年前後まで)	春			火種		三本に分かれた道具で採る	
27	a	上北町(上野)[低地]	昭和22	1947	69	男	シグボ		×								
28	b	上北町(上野)[低地]	昭和15	1940	76	男	シギボ		×								
29	c	上北町(上野)[低地]	昭和25	1950	66	男	シギボ		×								
30	d	上北町(上野)[低地]	昭和11	1936	80	女	シギボ		×								
31	e	上北町(上野)[低地]	昭和9	1934	82	男	シギボ		(○)	(戦前～戦中)		(採取)					
32	f	上北町(上野)[低地]	昭和元	1926	90	男	シグボ		×								
33	g	上北町(大浦)	昭和11	1936	80	男			(○)								
34	h	天間林村(榎林)	昭和14	1939	77	女	シギボ		○	昭和20年代まで	春	採取	田	田地改良	男	タデで切り込み、スコップで掘り採る	
35	i	天間林村(榎林)	昭和19	1944	72	男		アンタン	×	昭和20年代半ばまで		採取	田の脇	燃料	大人		
36	j	天間林村(榎林)	昭和10	1935	81	男	シギボ	アンタン	(○○)	(前の世代)		(採取) (採取)	湿地	燃料/燃料	大人		
37	k	天間林村(榎林)	昭和22	1947	69	男	シギボ	アンタン	×	(○)	戦後	採取	沢				
38	l	天間林村(榎林)	昭和17	1942	74	男	シギボ	アンタン	×	○	昭和20年代後半	春以降	採取	沢	田地改良	男	シコップやモッタ
39	m	天間林村(榎林)	昭和5	1930	86	女	シギボ	アンタン	×	×	昭和30年代には使用せず		(採取)	(沢)			
40	n	天間林村(榎林)	昭和21	1946	70	女	シギボ		×								
41	o	天間林村(榎林)	昭和22	1947	69	男	シギボ	アンタン	×	(○)	利用なし/(戦中)		(採取)	沢		横穴で掘削	
42	p	天間林村(榎林)	昭和10	1935	81	男	シギボ	アンタン	×	×	昭和20年頃採掘を見る		採取			村外	
43	q	天間林村(榎林)	昭和12	1937	79	女		アンタン	×		(かつて採掘された)		(採取)				
44	r	天間林村(榎林)	昭和46	1971	45	男		アタン	(○)	(昭和40年代まで)		採取	(家の側)	燃料(販売)			
45	s	天間林村(榎林)	昭和26	1951	65	男		アタン	(○)	(昭和30後半から40前半頃)		採取	(家の側)	燃料			
46	u	天間林村(天間館)	昭和13	1938	78	男			×								
47	v	天間林村(天間館)	昭和29	1954	62	男	シギボ/シグボ		×								
48	w	天間林村(天間館)	昭和15	1940	76	女	シギボ		×								
49	x	天間林村(野崎)	昭和2	1927	89	女	シギボ		×								
50	y	東北町(鶴ヶ崎)	昭和20	1945	71	男	シギボ		×								
51	z	東北町(舟ヶ沢)	昭和18	1943	73	女	シギボ[藻屑]		×								
52	α	東北町(舟ヶ沢)	昭和25	1950	66	女	シグボ		×								
53	β	東北町(田ノ沢)	昭和9	1934	82	女	シギボ		×								
54	γ	東北町(田ノ沢)	昭和20	1945	71	男			×								
55	δ	東北町(沼添)	昭和9	1934	82	男	シギボ		×								
56	ε	六ヶ所村(倉内)	昭和13	1938	78	女	シギボ		×								
補遺																	
57	ζ	上北町(大浦)	昭和9	1934	82	女	シギボ		(○)	昭和10年代～20年代前半		採取	田	燃料			
58	η	上北町(上野[低地])	昭和8	1933	83	女	シグボ		○	昭和47年ころまで	春	採取	湿地	燃料	男女	タデとモッタ	
59	θ	上北町(上野[低地])	昭和7	1932	84	女	シグボ		○	昭和31年より前ころまで	春秋	採取	田	田地改良	家族	タデと角スコップ	

注) No欄: No46-47欠番 利用の有無欄: 記号並記の場合、泥炭・亜炭の利用をそれぞれ○×で表す。

青森県上北地方におけるシギボ（泥炭）の利用

サイズ	乾燥と運搬	用途			
		暖房（燃料/設備）		炊事（燃料/設備）	
レンガ	その場でレンガ積み→馬車	シギボ	[出作小屋] 炉 [自宅] コタツ	マキ	炉+ナベ
	運搬→自宅乾燥	シギボ			
60-70cm角×10-15cm	その場で乾燥→馬車→小屋保管 [乾燥]			マキ	炉+ナベ
煙の幅、一律でない	畦で乾燥→ショイカゴ等→軒下保管 [乾燥]			[煮物]シギボ	炉 [煮物・保温] 鉄輪、缶
20-30cm角	冬から春まで放置 [乾燥]	[屋外] シギボ→S30後半	[屋外] 田端	雑材→雑材	炉+ナベ→マキストーブ+羽釜 [s20代]
30cm×20cm	その場で乾燥→牛馬 [麻袋]	シギボ+マキ	シボド	シギボ+マキ→マキ	炉→カマド
		(シギボ+牛糞)	[屋外] 田端		灰肥
ブロック塀の1個	運搬→自宅乾燥	シギボ	マキストーブ	(シギボ)	灰肥
	天日干し→運搬→自宅	シギボ?		シギボ?	
				初段→ガス→電気	スカガマ→ガス釜→電気釜
		マキ	炉 [S20代]→マキS	マキ→マキ→電気	炉 [S20頃]→マキS+羽釜→電気釜
		マキ	炉	マキ→初段→電気	炉+鍋→スカガマ+羽釜→電気釜
		マキ	炉	マキ→マキ→電気	炉+ナベ→カマド→電気釜
30×40cm 深さ30-40cmを2段→ 10cmスライス	仮寄せ乾燥→レンガ積み→人力 [ショイハゴ、苗カゴ、ヤヘウマ]→自宅納屋	シギボ+端材	炉、コタツ	シギボ+端材	炉+ナベ [他家] 電、煮物等は炉+足鼎
100cm角	放置→レンガ積み→現地の作業小屋保管	[他家]シギボ	[他家] 炉 [自家] マキS	[他家]シギボ	[自家] マキS→S30代ガス→S40代電気釜
50cm×30cm	バソリで運搬→自宅→ドンコロに掛け乾燥	シギボ	炉	マキ	炉
レンガ	田の脇に山積み→リヤカー→自宅小屋軒下	シギボ/シギボ燐、木炭	炉・マキS/コタツ	シギボ [マキ]→同	炉→マキS [炊事への利用は不確か]
		シギボ/クンタン+炭 (シギボ)	炉/コタツ (コタツ)	雑材→雑材	炉→マキS
一律でない	田で乾燥	[屋外]シギボ (シギボ)	[屋外] 田端		
				(シギボ)	
					火種
		マキ、流木	炉→マキS		
	田のクロに積み重ねて乾燥	[屋外]シギボ	[屋外] 田端		
	田のクロに並べて乾燥→馬車→家	シギボ+マキ	炉→マキS	シギボ+マキ	炉→カマド→マキS+羽釜→電気釜
		シギボ	屋外ではシギボだけでも燃やした		
	トロッコ→自然乾燥→家			マキ+アンタン	[屋外] 薪などを鍋釜で煮る
					(風呂・木炭バス)
	(トロッコか)	マキ			(風呂)
					(風呂、湯沸し)
	(天日干しか)			プロパン	(風呂)
		マキ	炉	マキ	炉
	マキ・木の根				
				マキ	カマド [S37-8頃] + 羽釜
				マキ→ガス	炉+ナベ、2口電+羽釜→ガス釜
		マキ	炉+ナベ [s20代]→マキS	マキ→マキ→ガス→電気	炉 [戦前]→マキS+ [鍋→羽釜]→ガス釜→電気釜
					[自家] 湯沸し [七輪]
30cm×15cm、厚さ5cm	小屋積み保管 [乾燥]	[屋外]シギボ	[屋外] 田端		
	田で乾燥→家保管	シギボ、ミシリ	コタツ、火鉢	[他家]シギボ [自家] 端材	[他家] スカガマのような器具
一尺角×10cm	畦までムシロ、テモッコ、リヤカーで運搬→ハの字→反転→積み重ね	[屋外]シギボ	[屋外] 田端	マキ→マキ	炉+ナベ→マキS+ナベ 煮物焼物 [鉄輪]

() 内は自身の経験ではなく伝聞。太字はアンタンについての証言を示す マキS＝マキストーブの略

注

- 2) 「泥炭」について『新版地学事典』(地学団体研究会 新版地学事典編集委員会編,平凡社,1996)では「湖沼、河川の後背湿地など排水不良地に生育する草本・樹木類およびコケ類などの遺体が、還元状態で堆積した未分解の有機物質」と定義する。泥炭のなかでとくに草本類を主体とするもの(草本泥炭)を「草炭」という場合がある。
- 3) 拙稿「青森県岩木川下流域におけるサルケ(泥炭)の利用」(青森県立郷土館『青森県立郷土館研究紀要』第39号pp.63-102)および「青森県下北地方におけるサルケ(泥炭)の利用」(同第40号pp.89-148)
- 4) 『広辞苑』では「すくも」の項に「藁屑(もくず)。一説に、草・萱などの枯れたものとも草の根ともいう。もみがら・もみぬかや泥炭をいう地方もある。すくぼ。すくど。すくざ。」とある。「シギボ」は語源的には海の中の藻などの屑や、草や萱などの枯れたものや根などを指す「すくも」に由来することばであり、地域によっては「泥炭」のことを指すことばであるという。一方、能田多代子は「シクボ」の項で「開墾の方式。田の形に区画して、一区画毎に掘り返し、草根は乾かして焼きそれを敷き散らす。最後に水をひき田を作る」と説く(能田1982『青森県五戸方言集』p.86)。つまり、「シギボ」は、「泥炭」を指す場合もあれば、「開墾の方式」を意味する場合もある。本稿では、「シギボ」を主に前者の意味で用いる。「3.整理と考察」では、今回の聞き取りのなかで最も多くみられる発音に近い表記として「シギボ」を用いる。
- 5) 青森県環境生活文化・スポーツ振興課県史編さん室編2001『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p.25
- 6) 青森県史編さん自然部会2001『青森県史 自然編 地学』pp.93-94 7) 田高昭二1978『小川原湖の自然』,東奥日報社,p.19
- 8) 岸俊武1876『新撰陸奥国誌』巻第六十二(青森県文化財保護協会発行1965『新撰陸奥国誌』第四巻,「みちのく双書第十八集」,p.257)
- 9) 編者不明1878(頃)成立『陸奥国上北郡村誌』肆 10) 東奥日報社1926「東奥日報」,大正15年5月14日朝刊
- 11) 東奥日報社編1928『青森県総覧』p.1038
- 12) 米内山義一郎生誕100年記念誌編集委員会編2010『米内山義一郎生誕100年記念誌 米内山義一郎の生き方』p.216.初出『グラフ青森』昭和59年11月号。
- 13) 明治22年まで上野村、明治22年浦野館村の大字となる。昭和33年上北町の大字。合併以後東北町。 14) 前掲『新撰陸奥国誌』,p.257
- 15) 「角川日本地名大辞典編纂委員会」編1985『角川日本地名大辞典』,p.1119 16) 上北町史編纂委員会編1987『上北町史』下巻,p.384
- 17) 前掲『角川日本地名大辞典編纂委員会』1985,p.1119 18) 東奥日報社編1928『青森県総覧』,東奥日報社,p.1038
- 19) 青森県教育史編集委員会編1972『青森県教育史』第一巻 記述篇1,p.325-326
- 20) 前掲『新撰陸奥国誌』,p.192-195.榎林村の項には「土壌産業等前村の如し」と記され、「前村」とは附田村、野崎村、花松村を指す。具体的には花松村の項に土地の状況が記されている。 21) 前掲『陸奥国上北郡村誌』参 22) 「天間林村史」編纂委員会編1981『天間林村史』(下巻)p.1000
- 23) 同書pp.929-935 24) 同書p.935 25) 同書pp.935-947 26) 同書p.969 27) 同書p.1225
- 28) 虎尾俊哉ほか編1982『青森県の地名』pp.196-197 29) 「天間林村史」編纂委員会編1981『天間林村史』(下巻)p.1460 30) 同書p.1352
- 31) 東北町史編纂委員会編1993『東北町史』中巻pp.580-581 32) 明治24年度。同書pp.583-585 33) 同書p.586 34) 同書pp.688-689,および692
- 35) 上北町史編纂委員会編1987『上北町史』下巻pp.609-610.昭和30年ころでも、上北郡では排水不良耕地が2割を占めていた,同書p.425.
- 36) 同書p.384 37) 林製作所のカモメホーム洗濯機か。発売は昭和32年。
- 38) 最後の一文は、特に誰りが強く、ことばを正確に聞き取ることができなかった。よって要約である。
- 39) 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編2001『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p.51
- 40) 現在では機械で編めるので若い人たちは手作業はほとんどしていないという(青森県環境生活部県史編さん室編1999『馬淵川流域の民俗』p.262)。
- 41) 前掲『天間林村史』p.1342 42) 新村出編1976『広辞苑』第二版補訂版p.1187
- 43) 地元の人は「ソブ」は「ソータン」にする前の「生もの」であると話す。前掲,拙稿2015,p.91 44) 前掲,拙稿2015,p.86
- 45) 江渡益太郎ほか1969『五戸町誌』五戸町誌刊行委員会,p.129.および,能田多代子1969『みちのくの民俗』津軽書房,p.64. ちなみに水持ちのよくない田のことを「ザル田」などともいう。
- 46) 菅江真澄『雪の出羽路 小鹿郡七』(内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第六巻,未来社,p.262)
- 47) 東奥日報社2007「東奥日報」,平成19年9月3日朝刊
- 48) 前掲『上北町史』下巻,p.384。 49) 前掲『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p.37 50) 同書p.67
- 51) 坂口豊1974『泥炭地の地学』東京大学出版会p.30,pp.48-52 52) 前掲『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』,pp.86-87
- 53) 野口清1943『亜炭』p.15 54) 鈴木淑夫2005『岩石学辞典』p.216 55) 地学団体研究会・新版地学事典編集委員会編1996『新版 地学事典』p.62
- 56) 前出、地学団体研究会・新版地学事典編集委員会編1996『新版 地学事典』p.62,p.248
- 57) 坂本文蔵1942「東北地方の亜炭とその利用」(財団法人東北産業科学研究所1942『東北産業研究第五号』p.9)
- 58) 龍野昌之1943「亜炭の現状及び将来」(財団法人東北産業科学研究所1943『東北産業研究第八号』pp.72-81)
- 59) 佐伯博蔵・綿引武司1962「亜炭鉱業の現状とその特色」(日本動力協会編『動力』12巻70号) 60) 前掲『天間林村史』下巻,p.1225
- 61) 昭和15年の推定では、東北地方では亜炭の埋蔵量、産額ともに山形、宮城、福島、秋田、岩手の順に多く、青森は六県中最少(坂本文蔵1942「東北地方の亜炭とその利用」(財団法人東北産業科学研究所1942『東北産業研究第五号』p.6,「東北地方における亜炭坑区」)。 62) 前掲『天間林村史』下巻,p.1225
- 63) Tokunaga,S.1954 Palynological Study on the Kamikita Lignite,Aomori Prefecture in Japan(Part1). *Bulletin of the Geological Survey of Japan*,5,p.253.
- 64) Sohma,K.1958 Palynological Studies on Pleistocene peaty lignites and a Pliocene lignite from Aomori Prefecture.*Ecological Review*,14,pp.292-293,296.
- 65) 前掲『天間林村史』下巻,p.1225 66) 前掲『青森県下北地方におけるサルケ(泥炭)の利用』p.148(注)36参照 67) 同書p.119
- 68) 同書p.148(注)36参照 69) 前掲『天間林村史』下巻,p.1225 70) 前掲 注63)に同じ